

恋愛と売春
(愛着付き)

はじめに

さて、今回の『恋愛と売春』（愛着付き）という作品は、一つは、『恋愛と売春』という作品と、もう一つは、『愛着について、作者と作品、芸術鑑賞』という作品を、一つに「統合したもの」であるが、その「内容」は、次のようなものである。

まず、「恋愛（恋）」というのは、プラトンの『饗宴』という作品の中では、「……その昔、人間の本来の姿は、第一に、人間は三種類あった。すなわち、今日の男女二種類のみでなく、第三の者がその上に存在していた。つまり、『アンドロギュノス』（男女）というのが一種をなして、容姿、名前とも男女を合わせ持っていた。しかも、強さや腕力にかけても、彼らは剛の者で、その心もまた、驕慢であった。そして、神々に刃向かうようになった」。——そこで、最初は「二つの体」（男女）であったものが、神々に刃向かうようになったので、神の怒りにふれて、「二つの体」（つまり男と女）に引き離されてしまった。そうなると、今度は、自分の「半身（片割れ）」にせひともめぐり逢いたいという強い欲求に襲われるというのが、まさに「恋（エロス）」であるということである。

次に、「売春」の問題であるが、それを辞書で引いてみると、そこには、「……女子が報酬を得て男子に身を任せること」とある。その場合、「愛情関係」は、基本的にはないことが多いのだろう。むしろ、「愛情関係」があるなしではなく、いわゆる「……報酬を得て、男子に身を任せる」ところに、「売春行為」が成り立つのである。それでは、「報酬」を得なければ、「売春行為」にはならないのかと問われれば、もちろん、それは、「売春行為」にはならず、ただの「遊び行為」になるのである。——そして、「売春」が成立するためには、どうしても次の「三つのもの」が一般的には必要不可欠であり、その一つは、富める側の人たちであり、次には、貧しい側に存在する女性たちであり、そして、もう一つは、この「二つのもの」が結びつくための「場」（古くは「売春宿」ということである。もちろん、直接、相手との交渉によって、「売春」が成立する場合もあるが、それは、目に見えない「場」（つまり「女性自身のみずから売春宿の主」となって交渉し、いわゆる「売春」が、実際に行なわれるのであり、結局は、同じことになるのである。

次は、「愛着」であるが、例えば、われわれの身のまわりには、もう実に色々なものや活動などに満ちあふれているわけだが、毎日、われわれは、それらのものと「関わり」を持ちながら生きていくわけである。しかし、ただ単にそれらと「関わり」を持ちさえすれば、それだけですぐにその対象に「愛着」が生じるというものでもなく、やはり、その対象とある程度「慣れ親しむ」ということがあって、初めて、その対象への「愛着」というものは、生じて来るものである。それでは、ある程度、「慣れ親しむ」ということがあれば、すべて、その対象に「愛着」というものが生じて来るのかと問えば、もちろん、そうではなく、やはり、その中でも、「特に気に入っているもの」（或いは「楽しい思い出や懐かしい思い出につながるようなもの」）にこそ、いわゆる「愛着」というものは、はっきりと生じて来るものである。

最後に、「作者」と「作品」との関係であるが、それは、まさに「親」と「子」との関係であり、母親は、自分の「胎内」で次第に「熟してきたもの」を外に「生み出す」ことになるが、それと全く同じように、作者の「頭の中」（或いは「心の中」）で次第に「熟してきたもの」を外に「生み出す」ということであり、そして、そのようにして生み出さ

れたものが、まさに「作品」ということである。——例えば、人間の「赤ん坊」は、親の「遺伝子」をしつかりと受け継いでこの世に生まれて来るものであるが、一方、「作品」は、その作者の「遺伝子」（その人の本質的なもの）をしつかりと内に宿して生み出されるものである。

そして、「作品」というのは、間違いなく、作者の「思惟内容」（つまり様々な「思いや考え」+漠然としたもの）から生み出されて来るものであり、それゆえ、「芸術鑑賞」とは、すなわち、最終的には、その「作品」が生み出された時の作者の「思惟内容」（つまり様々な「思いや考え」+漠然としたもの）へとさかのぼ逆さかのぼることに他ならないのである。

以上、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

平成二十九年十二月吉日（統合編）

如月翔悟

目次

はじめに

恋愛について

- 一、 恋（エロス）
- 二、 一目惚れ
- 三、 恋の最終地点

よき伴侶（ベターハーフ）

売春について

- 一、 売春の定義
- 二、 自己同一性の喪失
- 三、 セックスとは

売春の起源

- 一、 売春は、なぜ悪いのか？
- 二、 売春の実態
- 三、 結論

※ 参考文献

目次

はじめに

愛着について

- 一、音楽
- 二、子供の頃
- 三、食べ物
- 四、言葉
- 五、映画
- 六、人物
- 七、洋服
- 八、道具
- 九、趣味
- 十、愛するもの
- 十一、執着
- 十二、結び

作者と作品

序、芸術鑑賞

- 一、鑑賞の仕方
- 二、音楽鑑賞
- 三、古典芸能
- 四、四つの要素

*
*

恋愛について

恋愛について

例えば、プラトンの『饗宴』という著作のなかでアリストパネスという登場人物が、いわゆる「恋(エロス)」について非常に有名な話(演説)をする箇所があるので、その部分を拾い集めて要約してみると、次のようになるかと思う。

「……さて、諸君は、はじめに、人間の本性と、かつて人間にかかわりのあった事件とを学ばなければならない。そのむかし人間の本来の姿は、第一に、人間は三種類あった。すなわち、こんにちの男女二種類のみでなく、第三の者がその上に存在していた。つまり、『アンドロギュノス』(男女)というのが一種をなして、容姿、名前とも男女を合わせ持っていた。しかも、強さや腕力にかけても、彼らは剛の者で、その心もまた、驕慢であった。そして、神々に刃向かうようになった。……」

そこで、ゼウスをはじめ、ほかの神々は、彼らをどう処置したものか、寄り合い相談したが、結論が出なかった。(中略)、そこでゼウスは、さんざん考えたあげく、「……このたびの処置としては、彼ら一人一人を二つに切り離そうと思う。そうすれば、いまよりも弱くなるだろうし、それに数もますことであるから、われわれにとつて、いまよりも有益なものになりましょう。そして彼らは、二本足でまっすぐ立って歩くことになるだろう。」

——ともあれ、ぼくらは、平目のように、一つものを半分に分断されたのだから、一人一人が人間の割符というわけだ。だから、だれもが自分の割符を探し求めるのは、当然なのである。そして男性のなかでも、そのむかし男女と呼ばれていた両性者の片割れは、女好きであり、また、逆に、女性のほうでも、この男女の片割れは、男好きである。ところが女性のなかでも、割かれる以前の女(女女)の片割れは、むしろ女性に傾いていく。また、もともと男(男男)の片割れである男性は、男性的なものを追求し、少年のうちには、成人の男性を愛し、好んでその人たちのそばに寄り、そして、からみつく……」。

ただ、彼らは、おたがいに相手から何をもらいたいのか、それを言葉にあらわすことはできないのだろう。そこで、『……いったい、おまえたちが求めてやまないものは、できるかぎり完全に一体なものとなって、昼も夜も相手から離れないようにしたいということなのか……』。この言葉を聞いたら、だれ一人としてこれを否定する者はいないだろう。

(中略)、なぜなら、われわれの太古の姿はそれであり、あの当時われわれは完全なものだったということが、その原因をなしているのだから。されば、完全なものへのこの欲望と追求に対して、恋という名がつけられているのである。……」(『饗宴』189d-193d)

一、恋(エロス)

さて、ここで面白いと思うことは、まず、最初は「一つの体」(男女)であったものが、神々に刃向かうようになったので、神の怒りにふれて、「二つの体」(つまり男と女)に引き離されてしまったということである。そうなると、今度は、自分の「半身(片割れ)」にぜひともめぐり逢いたいという強い欲求に襲われるというのが、まさに「恋(エロス)」であるということである。そして、今日、われわれが「この人しかいない！」と心の底からそう思える相手にめぐり逢いたいと思うのは、言葉を換えれば、それは、まさに自分の「半身(片割れ)」にめぐり逢いたいと探し求めることであり、それが、まさに「恋(エ

ロス)」ということになるということである。

つまり、われわれ人間の「恋心」というのは、確かにいろいろな「異性」とめぐり逢い、そして、できるだけ数多くの異性と「恋愛」をすることが、いちばん幸せなことではないかと思いがちであるが、しかし、最終的にはやはり「身も心もほんとうに一体感が味わえる相手」(つまり「ベストハーフ」《最良の伴侶》)にめぐり逢いたいというのが、まさにわれわれ人間の本来の「恋心」ではないかと思う。確かにまったく別々の環境の中で生まれ育った男と女が、例えば、「割り符」がぴたっと一つになるような、「一体感」がほんとうに得られるかどうかと問われれば、それは、やはりなかなか難しいことになるかと思うが、しかし、われわれ人間の「心」というのは、やはりまさに「割り符」がぴたっと一つになるような、そういう「身も心もほんとうに一体感が味わえる相手」(つまり「ベストハーフ」《最良の伴侶》)にめぐり逢いたいというのが、まさにわれわれ人間の最も根底にある「恋心とその原動力(エロス)」ではないかと思う。確かに、できるだけ数多くの「異性」と親しく交わりたいという思いもあるだろうが、しかし、最終的にはやはりいわゆる「ベストハーフ」(最良の伴侶)にめぐり逢いたいと思うものなのである。なぜなら、われわれ人間の「心」というのは、その時だけ楽しいとか幸せであるとかいうことだけでは満足できずに、やはりもっと永続した心の底からの「幸せ感」や「満足感」などが得たいわけである。そして、そういう永続した「幸せ感」や「満足感」或いは「一体感」などが得られているような状態こそは、まさにほんとうの意味での「結婚」(つまりは男と女の結びつき)が真にできている状態にあるということである。

二、一目惚れ

例えば、よく『一目惚れ』というものを経験することがあるかと思う。それは、一体、どういふものかと言えば、それは、ある日、ある時、ある場所で、まったく思いがけないような感じであったりとめぐり逢った相手を見た時に、その人は、その一瞬、「アッ!」という感じの衝撃を受けると同時に、今までの「動きを奪われ」て、しばらく動けなくなるというものである。それは、なぜかと言えば、それは、その人の「心の中」では相手の異性に対して、「あつ、きれいだな!」とか、「あつ、カッコいいなあ!」というような思いに襲われて一杯になつているために、しばらく「動き」を奪われてしまうものなのである。しかも、一方だけがそういう「一目惚れ」に深く陥るのではなく、二人が同時にそのような「一目惚れ」に深く陥つた時には、その瞬間、「時計が止まった」ような感じで、相手の姿だけが「鮮明に見え」て、それ以外のまわりのものは、ほとんど薄れてしまうものなのである。しかも、お互いがそういう状態で、「相手を見つめながら、立ち止まっている」状態になるということである。もちろん、それは、一瞬のことかも知れないが、その時、一種の「心から心へのテレパシー」のようなものが働いている感じにもなるものである。それは、お互いが「同じような心の波長」を出し合っていて、それが「深く響き合っている」ような感じになる場合も時にはあるのだろう。それゆえ、そのようにお互いが同時に「一目惚れ」に深く陥って動けなくなつたような時には、そのままその場で別れてしまうのではなく、相手のところまで勇気をふるって行き、そして、「いま、どういふ心の状態」で自分の方を見ていたのか、しっかりと確かめてみたらよいのではないかと思う。

というのも、そのようにお互いが同時に「一目惚れ」に深く陥って動けなくなったような時には、ほとんどの場合、お互いの「心の波長」が非常によく似た（或いはよく合う）相手である場合が極めて多いからである。しかも、今、逢ったばかりなのに、なぜか相手との「距離感や違和感」などがまったく感じられず、それは、なぜか非常に遠い昔から親しかった相手にめぐり逢えたような感じにもなるものである。

そして、そのような「感じ」こそは、まさに自分の「半身」（つまり「ベストハーフ」）に遂にめぐり逢えたという時の、まさに「衝撃（或いは感動）」にも通じるものなのである。つまり、われわれ人間は、毎日、実に数多くの「異性」とめぐり逢っているわけだが、しかし、そのなかからどうすれば自分の「半身」（割り符のようにびたつと身も心も一つになれる相手）を見つけ出すことができ得るのか？ もちろん、それは、非常に難しいことに違いないが、しかし、多くの場合、それは、相手にめぐり逢ったその時に、なぜか前述の「一目惚れ」のような「衝撃」が、その人の「心の中」に生じてきて、ふともしかしたら、この人と自分は「結婚をするかも知れない」といった予感めいたものを感じるものではないかと思う。それは、お互いの「心の波長」（或いは「心の波動」）が、どこか深く響き合うようなところがあるからである。

三、恋の最終地点

例えば、距離感や違和感などをあまり感じない。なぜか親近感を感じて、あまりズレを感じない。深く交流できるような感じがする。なぜか心を割って、いろいろな話をしてみたくなる。話がいろいろとはずむ。なぜか親しみを感じる。お互いじっくりと合う。へだたりをあまり感じない。昔から親しい間柄であったような感じがする。好感が持てる。他人という感じがあまりしない。けんかをして、それほど憎めない。悪ぐちを言われても、それほど腹が立たない。なぜか心惹かれる。なぜか思いが募る。二人でいると、時間の経過をあまり感じない。心からうち溶け合えるような感じがする。その他、そのような「心の状態」がお互いの「心の中」にはつきりと生じてきたならば、少なくとも相手の「異性」とはお互いに「引き合っている」ことになるかと思う。つまり、「男と女の関係」というのは、何も長い時間をかけてはじめて理解し合えるといった性質のものではない。むしろ、相手の異性にめぐり逢ったその瞬間から、あるいは何度かのデートを重ねていくうちに、もう相手の異性に対するあるものを「予知（予感）」して、相手の異性と自分の「心の波長」（或いは「心の波動」）が合うか合わないかを微妙に感じ分けてしまうものである。確かに一緒に生活をしてみて、初めて相手の「性格や性癖」などを知るといえることはいくらかもあるだろうが、しかし、最も根本的なお互いの「心の波長」が合うか合わないかは、極めて初期の段階から感じ分けてしまうものではないかと思う。そして、相手の異性に対して「距離感や違和感」などをあまり感じず、なぜか非常に遠い昔から親しかったように思える相手であり、しかも、「一目惚れ」のような衝撃を感じた相手であれば、結婚をしたあとも、恐らく、お互い「うまくやっていたいける」ことが多いのではないかと思う。それは、なぜかと言えば、それは、やはりお互いの「心の波長」が深いところで響き合っているからである。つまり、われわれ人間の「心」というのは、確かに数多くの「異性」と親しく交わりたいという欲求とともに、最終的には身も心もびたつと一つに溶け合えるよう

な、まさに自分の「片割れ」(つまり「ベストハーフ」)に遂にめぐり逢えたと思えるような時にこそ、われわれ人間は、心の底からの「満足感や幸せ感」などが得られることになるのだろう。なぜなら、それこそは、まさにわれわれ人間の「異性」を愛し求める「恋」^{エロス}という旅路の、いわゆる「最終地点」(或いは「最終目的」)になるからである。

*

*

よき伴侶（ベターハーフ）

よき伴侶（ベターハーフ）

例えば、われわれ人間というのは、基本的には、いわゆる「理想の相手」（つまり「ベストハーフ」）をいつも愛し求めてやまないものであるが、しかし、現実には、そのような「理想の相手」（つまり「ベストハーフ」）とめぐり逢い、そして、つき合ったり、結婚するというようなことは、なかなかできにくいものであり、それゆえ、多くの場合、理想の相手ではないが、それでもより「よき相手」（つまり「ベターハーフ」）とめぐり逢い、そして、つき合ったり、結婚するというのが、ふつう一般的なことになるかと思う。

つまり、「最良の伴侶」（つまり「ベストハーフ」）というのは、誰もが自分の「心の中」で絶えず愛し求めてやまない、まさに「理想の相手」ではあるが、それは、例えば、芸能界のなかでも特に誰々に強く心惹かれて、もう夢中になっているというようなことは、あの意味では、そこに「理想の相手」を見ていることになるのかも知れない。それに比べて、もう一方の、いわゆる「よき伴侶」（つまり「ベターハーフ」）というのは、むしろ「現実の相手」ということになり、それは、例えば、現実のなかでめぐり逢う実に数多くの異性のなかでも、特に心惹かれるような異性にめぐり逢った時に、できれば、その相手の異性とつき合いたいと思うようになり、それが、うまくいき、つき合うようになれば、それが、現時点でのいわば「よき伴侶」（つまり「ベターハーフ」）になるかと思うが、しかし、相手との関係がうまくいかなくなれば、今度は、別れるということになり、また、新しい相手を探し求めることになるかと思うが、それは、どのようなことを意味するのかと言えば、それは、まさにより「よき相手」を新たに探し求めるということである。

そして、そのより「よき相手」を探し求めるというのは、一体、どのようなことを意味するのかと問えば、それは、結局、その人の「理想の相手」（つまり「ベストハーフ」）にめぐり逢いたいという欲求に他ならないわけだが、しかし、そのような相手を見つけ出すことは、現実にはなかなか難しいことであり、それゆえ、いわゆる「理想の相手」（つまり「ベストハーフ」）により近い相手にめぐり逢いたいと、知らず識らずのうちに、探し求めていることになるのである。——つまり、誰もが自分の「心の中」で絶えず探し求めてやまないものは、まさに「理想の相手」（つまり「ベストハーフ」）ではあるが、しかし、現実にはなかなかそのような相手とめぐり逢うことはできにくく、それゆえ、その時、その時にめぐり逢ったより「よき相手」とつき合うことになるが、それが、いわば現時点での「よき伴侶」（つまり「ベターハーフ」）になるということである。

それでは、そのような「よき伴侶」（つまり「ベターハーフ」）に百分心の底からすべて満足でき得ているものだろうか？ それは、極めて難しい問題であり、たとえ現時点では満足でき得ても、やがては不満が生じて来るとすれば、その「よき伴侶」（つまり「ベターハーフ」）も、結局は、いわゆる「理想の相手」（つまり「ベストハーフ」）ではなかったということになり、それゆえ、いわゆる「理想の相手」（つまり「ベストハーフ」）にめぐり逢えるまでは、その人の「恋」という旅路は、なおも続くことになるということである。——つまり、われわれ人間の「心」というのは、最終的には、身も心もほんとうにびたっと一つに深く溶け合えるような、まさに自分の「片割れ」（つまり「ベストハーフ」）そのものに遂にめぐり逢えたと思えるような時にこそ、われわれ人間の「心」というのは、心の底からの「満足感や幸せ感」などが得られることになるのだろう。なぜな

ら、それこそは、まさにわれわれ人間の「異性」を愛し求める「恋^{エロス}」という旅路の、いわゆる「最終地点」(或いは「最終目的」)にもなるからである。

良き伴侶

得てぞ知るや

良き人生

さて、ここで最大の「問題」となるのは、次のようなことである。つまり、プラトンの『饗宴』という著作のなかでアリストパネスという登場人物が、いわゆる「恋(エロス)」について非常に有名な話(演説)をする箇所があるが、そのなかで、最初は「二つの体」(男女)であったものが、神々に刃向かうようになったので、神の怒りにふれて、「二つの体」(つまり男と女)に引き離されてしまうということである。そうすると、今度は、自分の「半身(片割れ)」にぜひともめぐり逢いたいという極めて強い欲求に襲われるというのが、まさに「恋(エロス)」であるということである。そして、ここで最も大事なことは、相手がまさに自分の「半身(片割れ)」そのものであるならば、文字通り、その「相手」(つまり自分の半身《片割れ》)そのものとは、百%すべてありとあらゆるところまで「割り符」がびたつと一つになるような、まさに完全なる「一体感」がうそ偽りなくほんとうに得られることになるのだろう、それこそは、まさに「身も心もほんとうに一体感が完全なる形で味わえる相手」(つまり「ベストハーフ」《最良の伴侶》)そのものである。——それゆえ、その「相手」(つまり自分の「半身《片割れ》」)そのものを「ベター」(よりよき相手)と呼ぶことは、明らかに「間違」であり、その「相手」(つまり自分の「半身《片割れ》」)そのものは、文字通り、まさに「ベスト」(つまり「ベストハーフ」《最良の伴侶》)そのものであると呼ぶべきものである。

ところが、現実の世界においては、例えば、何から何までまったく別々の環境の中で生まれ育った男と女が、例えば、「割り符」がびたつと一つになるような、そういう「一体感」がほんとうに得られるかどうかと問われれば、それは、やはりなかなか難しいことになるかと思うが、しかし、われわれ人間の「心」というのは、やはりまさに「割り符」がびたつと一つになるような、そういう「身も心もほんとうに一体感が味わえる相手」(つまり「ベストハーフ」《最良の伴侶》)にめぐり逢いたいというのが、まさにわれわれ人間の最も根底にある「恋心とその原動力(エロス)」になるかと思う。もちろん、現実には、そのような「理想の相手」(つまり「ベストハーフ」)とめぐり逢い、そして、その「理想の相手」とつき合ったり、結婚するということは、極めて難しいことであり、それゆえ、文字通りの「理想の相手」ではないが、それでもそれにより近い「よりよき相手」(つまり「ベターハーフ」)とめぐり逢い、そして、その相手とつき合ったり、結婚するというのが、ふつう一般的なことになるかと思う。——つまり、「最良の伴侶」(つまり「ベストハーフ」)というのは、誰もが自分の「心の中」で絶えず想い描いてやまない、まさに「理想の相手」そのものではあるが、現実には、そのような「理想の相手」(つまり「ベストハーフ」)を見い出すことは極めて難しいことであり、それゆえ、いわゆる「理想の相手」(つまり「ベストハーフ」)ではないが、その「理想の相手」(つまり「ベストハーフ」)により近い相手、つまり、まさに「よりよき相手」(つまり「ベターハーフ」)

とめぐり逢い、そして、その相手とつき合ったり、結婚するというのが、まさにわれわれ人間のあるがままの「現実の姿」(つまり「現実」そのもの)になることである。

それゆえ、今日、「ベターハーフ」という言葉は、いわゆる「プラトニック・ラブ」という「言葉」と同じように、本来とはかなり違った「意味合い」で使われることが多いかと思うが、しかし、本来は、いわゆる「理想の相手」(それはもともとは自分の「半身」(片割れ≒)そのもの)のことであったが、それとほとんど同等の相手を、まさに「ベストハーフ」と呼び、そして、そこまではいかない「現実の相手」を、まさに「ベターハーフ」と呼ぶのが、まさに「ベストハーフ」と「ベターハーフ」という言葉の「正しい使い方」になるかと思う。

*

*

ベターより

ベストが恋しい

恋心

売春について

売春について

この問題は、実に古くて新しい問題であるとともに、未だこれという「最終的な答え」が得られないままに、今日にまで来ているのではないかと思う。——そこで、「売春」について、考えてみたいと思うが、例えば、「売春」という言葉を聞いて、すぐに頭に浮かんで来るものの一つとしては、いわゆる『ヨハネ福音書』のなかに出てくる「姦淫の女」の章があり、その部分を少し長くはなるが、全文を引用して考えてみたいと思う。

「……イエスはオリブ山やまに行かれた。次の朝早くまた宮みやに行かれると、人々が皆あつまつて来たので、座まつて教えておられた。すると聖書学者とパリサイ人とが、姦淫かんいんの現行犯げんこうはんで押おえられた女をつれてきた。みんなの真中まんなかに立たせて、『先生、この女は姦淫かんいんの現場げんばを押おさえられたのです。モーゼは律法りつぽうで、このような女を石で打ち殺すように命じていますが、あなたはなんと言われますか』。こう言ったのは、イエスを試ためして、訴うえ出る口実こうじつを見つげるためであった。イエスは身をかがめて、指ゆびで地ちの上に何か書いておられた。しかし彼らがつこく尋ねていると、身を起たちこして言われた。『あなた達なの中で罪つみのない者が、まずこの女に石を投げつけよ』。そしてまた身をかがめて、地の上に何か書いておられた。これを聞くと、彼らは、老人ろうじんを始めとして、ひとりびひとり出ていって、ただイエスと、真中まんなかに立ったままの女が残った。イエスは身を起たちこして女に言われた。『女おんなの人ひと、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罰ばつしなかったのか』。『主しゅよ、だれも』と女がこたえた。イエスが言われた、『わたしも罰ばつしない。おかえり。今からはもう罪を犯さないように。』……」

さて、イエスは、実際にこのような場面に直面し、そして、実際にこのような言葉を言われたのかどうか？ つまり、本当のことなのか、それとも作り話なのかという問題が残るが、ここではイエスが実際にこのような言葉を言われたかどうかは別として、ここに書かれている引用文の内容をそのまま受け入れて、考えを前に進めていきたいと思う。

というのも、イエスの言葉に、「……あなた達は、『姦淫をしてはならない』と命じられたことを聞いたであろう。しかしわたしはあなた達に言う、情欲をもって人妻を見る者は皆、すでに心の中でその女を姦淫したのである。それで、もし右の目があなたを罪にいだなうなら、えぐり出して捨てよ、体の一部が無くなっても、全身が地獄に投げ込まれない方が得であるから。もしまた右の手があなたを罪にいだなうなら、切り取って捨てよ、手足が一本無くなっても、全身が地獄に行かない方が得であるから。また、『妻を離縁する者は離縁状を渡せ』と命じられた。しかしわたしはあなた達に言う。不品行以外の理由で妻を離縁する者は皆、その女に姦淫を犯させるのである。離縁された女と結婚する者も、姦淫を犯すのである。……」(マタイ福音書)

つまり、これほど「姦淫」に対しては、きびしい考え方を持っていた人が、いわゆる「姦淫をした女」をそのまま「黙認」するようなことを言われるだろうかという問題である。しかし、それはそうではなく、ここで最も大事なことは、最初の引用文のほうは、「姦淫をした女を他人が石をもって罰するという場合」であり、後者の引用文は、「自分自身の淫欲(な心)を自ら罰するという場合」であるということである。つまり、前者は、「他人を罰する場合」であり、後者は、「自分自身を罰する場合」であるということである。

そして、最初の引用文のなかで、イエスは、なぜ、「姦淫をした女を石をもって罰する」

ということに対しては、かたくなに沈黙を守り続けた一方で、なぜ、「あなた達の中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけよ。」というようなことを言われたのかと言えば、その最も根底にあったものは、恐らく、次の「自らの言葉」であつたであろう。つまり、「……（人を）裁くな。自分が（神に）裁かれなためである。（人を）裁く裁きで、あなた達も裁かれ、人を量る量りで、あなた達も量られるからである。なぜあなたは、兄弟の目にある塵が見えながら、自分の目に梁があるのに気付かないのか。また、どうして兄弟にむかつて、『あなたの目の塵を取らせてくれ』と言うのか。そら、自分の目に梁があるではないか。偽善者！ まず自分自身の梁を取つてのけよ。その上で、兄弟の目の塵を取つてやつたらよからう。』という言葉である。

つまり、大事なものは、何よりも「自分自身の心のあり方」なのであり、他人がどうであるからとか、世の中がどうであるからではなく、他人や世の中がどうであろうと、「自ら不正を行なわない」というところに、いわゆる「道徳（倫理）」の大原則があるわけである。例えば、「……あなた達は、『目には目、歯には歯』と命じられたことを聞いたであろう。しかし、わたしはあなた達に言う、悪人に手向かつてはならない。だれかがあなたの右の頬を打つたら、左をも向けよ。……」とあるが、それは、「不正に対して、不正で仕返しをする」というわれわれ人間の「本能や本性」に深く根ざした考え方に対して、「他人から不正を受けても、自らは不正を行なわない」という考え方に立つわけである。それは、なぜかと言えば、それは、いかなる「理由や正義」があろうとも、いわゆる「不正を行なうこと自体は、決して正しいことではない。」からである。——すなわち、「道徳（倫理）」の問題は、いわゆる「自ら故意に不正を行なわない」という、この一点に尽きるのである。（ただし、「自己防衛」のための言動は、それが「故意に不正を行なうもの」でない限りは、許されることになるのだろう。）

もちろん、法治国家においては、何らかの「犯罪」を犯した人は、いわゆる「裁判制度」によって何らかの「刑罰」を受けることになるかと思う。例えば、人殺しを行なえば、その人は、「殺人罪」の容疑者として法廷に立つことになるが、その場合、法廷には、検察側と弁護側、それに裁判官がいる形になるかと思う。そして、検察側の言い分と弁護側の言い分とを聞いて、最終的に裁判官が「判決」を下すことになるが、当の容疑者は、それらの「一部始終」を極めて微妙なところまで感じ分けながら、どこか不思議な思いに襲われているに違いない。なぜなら、人殺しを行なった時の「生々しい状況や心の微妙な動き」などをほんとうに知っているのは、まさに「自分自身（容疑者）」だけだからである。

例えば、初公判において、検察側の「起訴状朗読」を黙って聴きながら、「そこはその通り、そこはそうではない」と、文字通り、一字一句をどこまでも極めて厳密に感じ分けながら聴いているのは、当の容疑者だけであり、それ以外の検事も弁護士も、また、裁判官もその他の人たちも、その最も肝心かつ極めて微妙な「核心部分」については、容疑者が正直に告白しない限りは、何ひとつ厳密には知り得ないことになるわけである。

つまり、われわれ人間の「罪」と「罰」というのは、その人自身がいちばん自分が犯した「罪」の何たるかは、極めて微妙なところまで感じ分けけるとともに、その自分自身が犯した「罪」に対して、裁判上の「刑罰」というのは、いわば外的な「罰」に過ぎないということである。そして、最終的に自分を裁くものは、やはりわれわれ人間の「心の中」（或いは「魂の中」）でも、いわゆる「理知的部分」（その最も奥深い「無意識の世界」に

深く内在しているであろう敢えて「内なる神」であり、それは、決して「悪」を欲しないし、また、「悪」とはどこまで行っても妥協できないとともに、自分自身の「善悪」をどこまでも厳密に感じ分けている存在でもあるわけである。つまり、他人をごまかすことは、いくらでもでき得るだろうが、しかし、自分自身をごまかすことはでき得ず、絶えず自分自身が犯した「罪」に対して、いわゆる「理知的部分」(その最も奥深い「無意識の世界」に深く内在しているであろう敢えて「内なる神」)によって厳密に吟味され続けている。内なる「審判」(つまりは「内的制裁」(罰))を受けざるを得ないということである。それが、まさにわれわれ人間の「罪と罰」ということになるのである。

一、売春の定義

さて、本題である「売春」の話に戻りたいと思うが、「売春」というのは、一体、何なのか？ それを辞書で引いてみると、そこには、「……女子が報酬を得て男子に身を任せること」とある。その場合、「愛情関係」は、基本的にはないことが多いだろう。むしろ、「愛情関係」があるなしではなく、いわゆる「……報酬を得て、男子に身を任せる」ところに、「売春行為」が成り立つということである。それでは、「報酬」を得なければ、「売春行為」にはならないのかと問われれば、もちろん、それは、「売春行為」にはならず、ただの「遊び行為」になるということである。

そして、われわれ人間が「性交渉を持つ場合」には、だいたい次の三つぐらいに大別できるのではないかと思う。——つまり、一つは、軽い「気持ち」(つまり「遊び心」)から生じる、いわゆる「遊び」型セックスであり、一つは、何らかの「下心」(多くは「打算」)から生じる、いわゆる「打算」型セックスであり、そして、もう一つは、相手の異性に心から「愛情」を寄せていて生じる、いわゆる「愛情」型セックスということになるかと思う。そして、「売春行為」というのは、言うまでもなく、売る側は、「お金」(報酬)を得るためのいわば「打算」型セックスであり、一方、買う側は、(軽い気持ちで)楽しむといういわば「遊び」型セックスになるかと思う。もちろん、実際には「遊び、打算、そして、愛情」などがいろいろとからみ合い、それだけより複雑で生々しい様相を呈しているのだろうが、基本的には、そういうことが言えるのではないかと思う。

また、「売春」を行なう理由としても、やはり、次の三つぐらいに大別できるのではないかと思う。すなわち、一つは、やはり、「遊び」型売春であり、それは、軽い気持ちで性交渉を持ち、そして、そこで得た「報酬」(お金)で、例えば、何かほしいものを買ったり、或いは、旅行に出かけたりするという、いわゆる「遊び」型売春である。次に、「生活」型売春があるかと思うが、それは、主に「生活を維持するために行なわれるもの」であり、それゆえ、経済的に余裕ができれば、行なう必要がなくなる「売春行為」になるかと思う。そして、もう一つは、いわゆる「職業」型売春であり、それは、一般に性風俗関係の店やその他に所属していて、そして、その所属しているところの指示に従って、いわゆる「売春行為」を行なうというものである。

それでは、「売春」のいったいどこがどのようによいというのだろうか？ 一般に、セックスも楽しめ、その上、お金まで手に入るのだから、これ以上のものはないではないかという「考え方」があるかと思う。もちろん、そのような「考え方」は、プラトン風と言

えば、われわれ人間の「魂」というのは、「欲望的部分」と「気概（激情）的部分」それに「理知的部分」とに分かれるわけだが、そのなかの、いわゆる「欲望的部分」に支配されている人たちの「言い分」になるかと思う。そして、実際は、好きな時に、好きな相手と、好きなようにセックスをするから楽しいのであり、セックスをしたくない時に、特に好きでもない相手と、セックスをするようなことは、それほど楽しいことではないのだろう。また、その時、その時が楽しければ、それでいいではないかという、そういう「刹那主義」的な「考え方」もあるかと思うが、たとえその時はよくても、長い人生のなかでは、やはりあとで後悔するようなことも多くなるのではないかと思う。

二、自己同一性の喪失

それはともかく、「売春」という行為は、まさに自己の「肉体（性）の商品化」であり、「不特定」（或いは「ある程度特定」）の相手と「性交渉」を持つことによって、基本的には、お金を得ようとする行為である。その場合、一般に、相手の要求に応じて対応しなければならず、そこに「自己放棄」と「自己喪失」とが生じやすくなるとともに、たとえ多額のお金を手に入れたとしても、そのようなことを長く続けることは、自己の「内的崩壊」を招きやすく、自己の「内的足場」を失って、精神的には不安定になりやすいということである。というのも、自己を「商品化」することによって、どうしても相手に合わせた人間にならざるを得ないとともに、自ら考え、自ら判断し、自ら行動することをやめて、相手の要求に応じた行動をするようになるからである。もちろん、ここで自己の「商品化」の是非を問題にしているのではなく、自己を「商品化」することによって、その人自身の「本来の姿」を見失うことになるということである。というのも、相手に合わせて、自分をどんな変えていかなければならないからである。それゆえ、われわれ人間にとって最も大事なことは、誰々のようになることでは決してなく、自分の奥深くに眠っているであろう本来の「自分自身」とめぐり逢い、そして、その本来の「自己自身」となって、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間になることによってこそ、われわれ人間は、最も生き生きと充実した時を過ごすことができ得るようになるということである。なぜなら、そのような状態こそは、いわゆる「自己同一性の喪失」から真に開放されて、まさに「考える自分と行なう自分」とが完全に一体化している「心的状態」になるからである。

例えば、マリリン・モンローは、当時、最もセクシーな女優として人気があったわけだが、しかし、その「最もセクシーな女優として売っていた」がために、人前では、つねに「最もセクシーな女優」を演じなければならず、そのために、「商品化した自己のイメージ」と「ほんとうの自分との間」に次第にギャップが生じ、その生じてきた「ギャップ」がしだいに深まるにつれて、いわゆる「精神的バランス」を崩し、そして、「精神的不安定」が、さらに深刻化していくなかで、やがて、身を滅ぼすことにもなったのだらう。それは、何もマリリン・モンローだけの問題ではなく、実に数多くの人たちが自己を「商品化」することによって、逆に、その「商品化された自己のイメージ」と「ほんとうの自分との間のギャップ」に悩み苦しむようになり、やがて、いわゆる「精神的不安定」をどこまでも深めてしまうことになるが、それは、まさに「自己同一性の喪失」から生じるものである。

もちろん、それは、何も芸能人だけの問題ではなく、例えば、クリーンな政治家として自己を売っている人ならば、人前では、つねにクリーンを意識した言動にならざるを得ず、それゆえ、何か大きなスキャンダルなどを起こせば、それこそ、まさに「政治生命」にも関わってくる大きな問題になるかと思うが、それは、「言っていることとやっていることとが全然違うじゃないか」というところから生じる問題であり、その人の、いわば人間としての「倫理性(道徳性)」が真に問われる問題にもなるわけである。——つまり、いわゆる「自己同一性の喪失」という問題は、大きく分けて、次の三つぐらいに大別できるのではないかと思う。一つは、こうでありたいといういわば「理想の自分」と、そうではない「現実の自分」との間のギャップに悩み苦しむような場合である。例えば、ほんとうはこういう「職業(或いは仕事)」をやってみたいのに、なかなか思い通りの「職業(或いは仕事)」がやれないという場合や、また、もっと奇麗になりたい、もっとカッコよくなりたいたいという、そういうふうでありたいという「容姿・容貌」への願望と現実の自分の「容姿・容貌」との間のギャップに悩むような場合である。その他、それはもうどういうことであれ、こうでありたいという自分とそうではない現実の自分とのギャップに悩み苦しむような場合である。次は、「自分にまつわり付いているイメージ」と「ほんとうの自分との間のギャップ」に悩み苦しむような場合である。それは、意識的に作られたイメージであれ、あるいは自然発生的に生じてきたイメージであれ、その他、何であれ、「自分にまつわり付いているイメージ」と「ほんとうの自分とのギャップ」に悩み苦しむような場合である。そして、もう一つは、いわゆる「考える自分と行なう自分との不一致」から生じるものであり、例えば、頭の中では、ああしよう言おうと思ったり考えたりしているのに、実際には、それとは違うことを言ったり行なったりしてしまう自分に対して、自分でもあきれってしまうという問題である。

さて、この「考える自分と行なう自分との不一致」から生じる問題であるが、その原因の一つとして考えられるものは、その人の人間としての「内的成長」の未熟さから生じるものがあり、それは、未だ人間として未熟な段階にある「若い人すべての人たちに見られる心的現象」になるかと思う。つまり、自分の中に「二人の自分」がいるような「心的状態」であり、その「二人の自分」が、「心の中」で何かにつけてああでもないこうでもない葛藤し合っている状態であるが、その「二人の自分」が、やがて「一つに深く溶け合う地点」(これは、まさに「内的成長」の一つの到達点であるとともに、いわゆる本来の「自分自身」とめぐり逢う地点でもあり、そして、その本来の「自分自身」となることによってこそ、初めて、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間となる地点にもなるということである)。

一方、われわれ人間というのは、どれほど「内的成長」しても、どうしても様々な「欲望や感情」などに振りまわされやすいという傾向があるかと思う。それは、一体、どうしてかと問えば、それは、われわれ人間の「知性や理性」(つまり「理知的部分」というのは、いわゆる「動物から人間へと進化してくる過程で生じてきた未だ未熟なもの」に過ぎないが、一方、われわれ人間の「欲望や感情的部分」というのは、ほかの動物たちにも共通したより根源的かつより本能的なものだからである。それゆえ、いわゆる「頭」(つまり「知性や理性」)ではわかっていても、どうしても様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまうのも、ある程度は、仕方がないことなのかも知れない。

それはともかく、われわれ人間の「魂」というものを、プラトン風に「三つ」に分けてみると、——一つは、「欲望的部分」、一つは、「気概（激情）的部分」、そして、もう一つは、いわゆる「理知的部分」になるが、それはまた、「欲望的部分」に支配されている人、「気概（激情）的部分」に支配されている人、そして、「理知的部分」に支配されている人、というような「分類の仕方」もでき得るかと思う。

例えば、売春という行為を継続的に行なっているとすれば、それは、基本的には「欲望的部分」に支配されている状態になるだろうし、また、若い人などでツツパっているとすれば、それは、いわば「気概（激情）的部分」に支配されている状態になるのだろう。もちろん、どこに重点を置いて生きるかは、まさに各人の問題であって、他人がとやかく言う問題ではないかも知れないが、ただプラトンは、いわゆる「理知的部分」に全面的に支配されない限りは、真に「心の平穩」は得られないという考え方をしている。それは、なぜかと言えば、それは、いわゆる「欲望」には際限がなく、何度も何度も新たに満たさなければならぬとともに、その時々々の「欲望」が思うように満たされれば、それなりの「満足感」が得られるかも知れないが、逆に、思うように得られなければ、今度は、「不平、不満、怒り、恨み、憎しみ、憎悪、その他」などの感情に振りまわされてしまうものである。つまり、「欲望的部分」に支配されている人たちは、絶えず様々な「欲望や感情」などに振りまわされ続けている「心的状態」にあるということである。

一方、「気概（激情）的部分」に支配されている人たちというのは、基本的には「地位や名誉或いは男らしい気概」などを愛し求めるといふタイプであり、その「気概」が健全な方向に向かっていている間は、特に問題はないだろうが、その「気概」が悪い方向に向かえば、何かにつけて、他人とぶつかり、言い争っては、気に入らないことにはすぐに激怒して、ケンカをすることも多くなるかと思う。それは、いわゆる「男らしい気概」というものにあまりに固執するあまり、引くに引けずに、最後まで張り合ってしまうからである。

最後に、「理知的部分」に全面的に支配されるというのは、真に「内的成長」することによってこそ可能であり、それは、何よりも「真善美」を愛し求めてやまないという「魂」の状態になるということであり、それ以外は、「理知的部分」に全面的にはなく、それなりに支配されている状態であり、それゆえ、様々な「欲望や感情」などに容易に振りまわされてしまう傾向があるかと思う。もちろん、真に「内的成長」していても、様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまうものではあるが、しかし、それは、その時だけであり、やがて、本来の何よりも「真善美」を愛し求めてやまないという「魂」の状態にもどるといふことであり、もし、いつまで経っても、元の状態に戻れないとすれば、それは、その人の持つて生まれた人間としての「資質や性格あるいは素質」などが、それほど優れたものではないのかも知れない。

三、セックスとは

さて、「売春」の問題であるが、それは、そのまま「セックス」の問題とも直結するものであり、それゆえ、「セックスとは何か」という問題にもなるかと思う。そこで、「セックスとは何か」という問いに対しては、セックスとは、いわゆる「性的欲求」（或いは「性的快感」）を満たそうとする行為であり、それは、基本的には「肉体の渇き」をいやす行

為であり、一方、いわゆる「心の渇き」を真に満たすものは、基本的には「愛情」ということになるかと思う。それゆえ、「売春」(或いは「回春」という形では、たとえ「性的欲求」(或いは「性的快感」)を満たすことはでき得るとしても、いわゆる「心の渇き」を真に満たすことは、でき得ないことである。なぜなら、「心の渇き」を真に満たすものは、まさに「愛情」に他ならないからである。——つまり、「心」(或いは「魂」)を真に満たすものは、結局は、「心」(或いは「魂」)であるというのが、まさに「最終的な結論」になるということである。

それでは、なぜ、われわれ人間というのは、異性の肉体をとおして自分の「性欲」を満たそうとするのだろうか？ それはもちろん、いわゆる「性的欲求」(或いは「性的快感」)を満たそうとするためであるとともに、最も根源的には、その人の「利己的な遺伝子」が自分の「仲間(子孫)」を増やそうとしているからである。つまり、その人をしてセックスをするように根底からつき動かしているものは、その人自身でも全く自覚できない「利己的な遺伝子」からの働きかけであり、その「利己的な遺伝子」こそは、何よりも自分の「仲間(子孫)」を増やすことを絶えず望んでいるからである。そして、その「利己的な遺伝子」からの働きかけこそは、一般に、「本能」と呼ばれているものであり、われわれ人間の「子孫保存欲」を根底から成り立たせている源泉の一つになるのである。

最後に、「売春」に関する、いわゆる「善悪の問題」が残っているかと思うが、その「善悪の問題」を取り扱うのは、まさにわれわれ人間の「理知的部分」の働きであるとともに、その「理知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」というのは、いわゆる「売春」という行為を「善いもの」とは認めることができるのである。それは、一体、なぜなのか？ それは、われわれ人間の「理知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」というのは、基本的には、「……偽よりは真、悪よりは善、醜よりは美、そして、俗よりは聖」に価値を置くような傾向が強く、それゆえ、「売春」という行為に対しては、そこに「純粋性」(或いは「真善美」)を認めることができにくいがために、どうしても「善い行為」とは認めることができにくいということである。

一方、われわれ人間の「欲望的部分」(或いは「本能的部分」というのは、むしろ「売春」という行為は、セックスも楽しめ、その上、お金まで手に入るのだから、これ以上のものはないだろうという意識を生み出しているものである。そして、われわれ人間は、この「欲望的部分」と「理知的部分」とを同時に持ち合わせているがために、この「二つのもの」が、絶えず「心の中」で葛藤を繰り返して、ある時には、いわゆる「理知的部分」が「欲望的部分」をコントロールできている場合もあれば、逆に、「欲望的部分」に負けてしまい、つい「浮気や不倫或いは売春(回春)」というような行為を行なってしまうということである。それは、いわゆる「欲望的部分」に振りまわされている「心的状態」であり、その状態をわれわれ人間の「理知的部分」から見れば、どうしてもそれを「善いこと」とは認めにくいということである。——なぜなら、そこに「不純性」をみてしまうからである。それゆえ、われわれ人間は、他人の「浮気や不倫或いは売春(回春)」というような行為をみると、どうしても批判的になるのも、われわれ人間の「理知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」というのは、本来的に何よりも「純粋性」(或いは「真善美」)を愛し求める傾向が強いからである。

もちろん、実際には、「欲望的部分」と「気概(激情)的部分」それに「理知的部分」などが複

雑かつ微妙にからみ合っては、われわれ人間のまさに現実の生々しい「言動」を生み出して
いることになるのだろう。

*

*

売春の起源

売春の起源について

さて、「売春」の起源としては、人類の歴史とともに極めて古くから行なわれてきたものであるが、その「売春」というもの（その仕組み）が成立するためには、どうしても富めるものと貧しいものが、その社会に発生することがその大前提になるかと思う。というのも、貨幣もなく、すべての人たちが同じような経済レベルで共同で生活していたような時には、いわゆる「売春」という行為は、一般的には発生しにくいのではないかと思う。

やがて、富めるものと貧しいものとが自然発生的に生じてきた時に、富める側の人たちは、その富める力で、いろいろなものを手に入れようとするものであるが、その一つとして、いわゆる「女性」たちがその対象になったということである。つまり、富める側の人たち、そのほとんどは、男性であるが、その富める側の人たちは、一方の貧しい側の人たちのなかに存在する女性たちにも目をつけて、その貧しい側の人たちのなかに存在する女性たちを、いわば何とか手に入れようとするものであるが、その場合、大別すれば、次の二つの場合が考えられるかと思う。その一つは、女性自身、相手の男性の人間的魅力に心惹かれてなのか、それとも家柄や経済力その他などの魅力に心惹かれてなのか、その他、どのような理由からであれ、その人なりに納得して、富める側の相手の男性のところを身を寄せるような場合と、もうひとつは、そうではなく、相手の経済力の力などによって、多くは無理やり「買い取られる」（例えば「人身売買」的なもの）が自然発生的に生じて、そのような方法で女性を手に入れるような場合もあったかと思う。

もちろん、この段階では、まだ「売春」という行為は、発生していないことになる。そして、「売春」という行為が発生するためには、もう一つの存在が、どうしても必要不可欠になるということである。それは、いったい何かと問えば、それは、「売春」が成立するための「場」というものであり、その「場」というものが、どうしても必要不可欠になって来るということである。そして、その「場」というものは、古くは「売春宿」、そして、今日では「風俗店」、あるいは何らかの「売春組織」ということになるかと思う。

さて、「売春」が成立するためには、どうしても次の「三つのもの」が一般的には必要不可欠になって来るかと思う。その一つは、富める側の人たちであり、その次には、貧しい側に存在する女性たちであり、そして、もう一つは、この「二つのもの」が結びつくための「場」（多くは「売春宿」ということである。もちろん、三番目の「場」というものを媒介とせずに、直接、相手との交渉によって、「売春」が成立するという場合も多いかと思うが、その場合、例えば、援助交際というものがあるが、それは、買う側の男性と、売る側の女性とが存在し、そして、もう一つ、目に見えない「場」（つまり「女性自身のみずから売春宿の主」となって交渉し、いわゆる「売春」が、実際に行なわれていくということであり、結局は、同じことになるかと思う。

そして、その「売春宿」に存在する女性たちというのは、多くの場合（或いは「ほとんどの場合」）、もともとは、貧しい側の人たちであり、そのためにこそ、自ら望んでそのようなところに身を寄せたのか、それとも何らかの人身売買的な形で売られてきたのか、その他、どのような理由からであれ、そこに存在する女性たちというのは、もともとは、貧しい側の人たちであったということである。というのも、もともと富める側の女性たちであるならば、何も「売春行為」などを行なう必要などどこにもなく、その富める力によ

って、いくらでも相手を「手に入れる」ことができ得るからである。つまり、「売春」というものが成立するためには、どうしても「お金を持つている側」と「お金を必要とする側」との存在が、何よりも必要不可欠であり、そのためにこそ、「売春」行為というものが発生するということである。もし「お金というものをまったく必要としない、むしろいらないという」ならば、そもそも「売春」など行なう必要などどこにもなく、セックスを楽しむ「遊び」行為か、或いは、愛情関係から生じる「恋愛」などを心から楽しめば、それでよいということである。

つまり、「売春」行為というのは、何よりも「お金を手に入れるための行為」であり、それ以外の理由は、すべて二次的なことになる。それが、まさに「売春」行為というものの実体である、ということである。それゆえ、セックスも楽しめ、その上、お金まで手に入るのだから、これ以上のものはないではないかという考え方があるかと思うが、その場合、お金が手に入ることこそが第一であり、セックスが楽しめるかどうかなどは、所詮、二の次になるというのが、まさに「売春」行為である、ということである。

一、売春は、なぜ悪いのか？

さて、「売春」は、なぜ悪いのか？ この「問い」に対する最終的な「答え」も、ここですべておきたいと思うが、それは、次のようになるかと思う。

まず、「売春」の起源としては、上述のように富める側と貧しい側とが存在し、そして、貧しい側では、このままではとても生きていけない、あるいはとても生活できないというような状況に追い込まれた時に、その家族のためとか、あるいは家族（或いは「自分」）が生きていくためにはどうしてもとか、あるいは借金の返済のためとか、その他、どのような理由からであれ、何らかの理由によって、いわゆる「身を売る」という行為（行動）が生じて来るということである。そして、そのような「行為」（行動）が成立するためには、当然のことながら、それを「買う側の人たち」がどうしても必要不可欠になるかと思うが、それがまさに「富める側の人たち」（つまり「少なくとも女性を買うだけのお金を持つている人たち」ということであるとともに、そのような「場」を提供してくれるものが、いわゆる「売春宿」ということになるかと思う。

そして、そのような「場」を提供してくれる人たち、つまり、「売春宿」を経営している人たちというのは、当然のことながら、そこで働いてくれる女性たちが必要不可欠であり、そのような女性たちをどこから見つけるのかと言え、そのほとんどが、いわば「貧しい側の人たちのなかに存在する女性たち」であり、その中でも、「お金がどうしても必要不可欠であると差し迫っているような人たち」が多いかと思うが、その場合、女性自らが進んでそのような場所に入っていくような場合もあれば、何らかの「人身売買的」な形で手に入れるというような場合もあるかと思う。そして、そのような形で手に入れた女性たちを、いわば「売春婦」として働かせることになるかと思うが、その場合、その女性たちを人間として大事に扱うような場合もあれば、逆に、非人道的な形で扱うような場合もあり、とくに後者の場合には、いわば「人権がじゅうりんされ、物のように扱われる危険性が高くなる」ということである。

そして、この「人権がじゅうりんされ、物のように扱われる」ということこそが、すな

わち、「売春の禁止」(つまり「売春はよくない」という考え方が成立する、もともとの起源と考えてもよいのではないかと思う。もちろん、たとえ人間として大事に扱われているとしても、そこで行なわれていることは、結局は、物のように「人間」が金で売買されているということであり、それゆえ、いわゆる「人権がじゅうりんされ、物のように扱われる」ということでは、何ら変わるところはないとともに、そのような「場」が、また、様々な「犯罪の温床」ともなり得るということである。

例えば、今日では、「インターネット」というものが世界中に普及しているので、そのような「場」を利用して、つまり、今までのような「売春宿」というような「場」ではなく、インターネット上の「場」というものを利用して、例えば、出会い系サイトなどを介して、いわゆる「売春」などが横行し、その結果、実に様々な「犯罪」などが生じることにもなるということである。というのも、「売春」という行為(行動)は、ただ単に「売春」という行為(行動)だけに留まるものではなく、そこには実に様々な「利害」や「損得」その他などが実に生々しく複雑にからみ合ってくるものであり、それゆえ、その結果として、実に様々な「犯罪の温床」ともなりやすいということである。

二、売春の実態

さて、今までは「売春」とその周辺の問題について考えてきたわけであるが、最後に、「売春」そのものが、なぜ悪いのか？ この問題に対しても答えておきたいと思う。

例えば、『売春防止法』の冒頭には、「……この法律は、売春が人としての尊厳を害し、性道徳に反し、社会の善良の風俗をみだすものであることにかんがみて」とあり、また、その売春の定義としては、「……対償を受け、又は受ける約束で、不特定の相手方と性交すること」であるととなっている。つまり、なぜ、「売春」が悪いのかと言えば、それは、「……人としての尊厳を害し、性道徳に反し、社会の善良の風俗をみだすもの」であるからであり、それが、まさに「法律上の理由」になっているということである。

もちろん、この問題を徹底的に考える場合には、どうしても実際に「売春」をしている人たち、あるいは過去に「売春」をした経験のある人たちが、その結果として、一つは、精神面で、一つは、肉体面で、一体、どういふ影響を受けたのか、あるいは現に受けているのか、ということを徹底的に考察してみなければならぬが、そのようなことは、極めて長い時間と困難とを伴うものであるので、ここでは、ごく一般的な考察だけに留めておきたいと思うが、まず、精神面で受ける影響というものには、一体、どういふものがあるのだろうか。例えば、「売春」を行なう前と、「売春」を行なった後では、一体、何がどう変わるのだろうか、それとも、特に変わるところはないのだろうか。この問題に答えを出すことは、極めて難しいことではあるが、恐らく、次のようになるかと思う。

例えば、われわれ人間の「魂」というのは、プラトン風に言えば、「欲望的部分」と「気概(激情)的部分」それに「理知的部分」とに分かれるわけだが、その場合、その人が「理知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」)に強く支配されているような人であるならば、いわゆる「罪悪感」(或いは「自責の念」)などに襲われる傾向は、それだけ強くなるだろうし、逆に、いわゆる「理知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」)の支配よりも、いわゆる「欲望的部分」の支配のほうがより強い人であれば、

それだけ「罪悪感」(或いは「自責の念」)などに襲われる傾向は、それだけ弱くなるということである。

もちろん、それに加えて、その人の「理知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」)が、どのくらい「成長・成熟」しているかによっても、違いがはっきりと生じて来るものであり、それゆえ、たとえ「理知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」)に強く支配されているとしても、その人の「理知的部分」(つまり「知性+理性+母体のようなもの」)が、まだ未熟な状態であるならば、例えば、正義でもないことを何か正義だと思い込んで、逆に、不正なことを行なってみたり、また、勇気でもないことを何か勇気だと思い込んで、逆に、無謀で愚かなことなどを行なってみたり、あるいは、何よりも大事なものを粗末に扱い、それほどでもないようなものを何か非常に価値あるもののように思い込んだりしやすいものである。だからこそ、真の意味での「内的成長」というのは、どうしても必要不可欠になって来るということである。

例えば、過去に、あるいは現在は現在、売春を行なっているということ、後ろめたい気持ちや負い目を感じたり、また、他人に知られることを恐れたり、そのことで脅(おど)されていたり、あるいは「人間関係」が崩(くず)れてしまう「危険」(リスク)が生じる場合もあれば、むしろ、人によっては、「売春やセックス」が楽しくてしようがないという場合もあるだろうが、また、それは、「精神面」だけではなく、もう一方の「肉体面」においても、例えば、性的に弄(もて)ばれる嫌悪感などをはじめ、「……性病、妊娠、中絶、性的暴力や傷害、屈辱的な扱い、その他」、そのような何らかの「実害」の被害を受けるようなことで、いわゆる「情緒的不安定」に深く陥るといふ危険性(リスク)が生じる場合もあるのだろう。

それゆえ、本来であれば、「売春」など行なわないほうがよいわけだが、それでは、なぜ「売春」を行なうのかと言えば、その多くは、結局は、「お金がほしいから」であり、もし「お金などいらぬ」というならば、そもそも「売春」を行なう必要などどこにもなく、セックスを楽しむ「遊び」なり、あるいは愛情関係から生じる「恋愛」などでよいということになるのだろう。しかし、それは、そうではなく、セックスも楽しめ、その上、お金まで手に入るといふ、いわば「一石二鳥」を考えているからだという場合もあるかと思う。その場合、そのどちらにより重点が置かれているかによって、つまり、遊びの方により重点がおかれる場合には、いわば「遊び」型売春であり、一方、何よりもお金のほうに重点がおかれるものは、まさに「本来」型売春ということである。

そして、「遊び」型売春というのは、多くの場合、それほど差し迫った状況ではなく、例えば、なにか買いたいものがあるからとか、どこか旅行に行きたいからとか、あるいは何か遊ぶための小遣いなどがほしいからというような、いわば比較的軽い意識から手っ取り早くお金を手に入れるための手段としての「売春」であり、例えば、未成年者たちが遊び感覚で行なっている「売春」などは、ほとんどこの範疇に属するものではないかと思う。

一方、「本来」型売春というのは、多くの場合、差し迫った状況から生じる場合が多く、どうしてもお金がほしいということであり、しかも、ある程度まとまったお金がほしいという、その他、そのような理由からこそ、いわゆる「売春」を行なうという場合である。その場合、本人が望んで、あるいはいやいやであれ、ともかく本人の意志でそのようなことを行なう場合と、もう一つは、本人の意志とはまったく関係なく、いわば無理やりあるいは人身売買的な形で、そのような状況に置かれてしまうという場合があるかと思う。

例えば、風俗店などで働いている女性たちというのは、ほとんどの場合、最初は、貧しい状態（つまり「お金がほしい」という状態）から入っていくことになるかと思うが、しかし、やがては、一般の人たちよりも多くのお金を手に入れることも多くなり、そのような状況になっても、なお続ける理由としては、一つには、やはりもつとお金がほしいという場合もあるだろうし、また、楽しいからという理由もあるかも知れないし、あるいはなにかお店を持ちたいからとか、お客さんが喜んでくれるからとか、その他、そのような理由によって続ける場合が多いのではないかと思う。ただ、ここではつきりと区別しておかなければならないことは、主に接客を中心とし、肉体的な接触などはあるとしても、性交渉そのものは行なわないという場合と、もう一つは、直接、性交渉（或いは「それとほとんど同じようなこと」）を行なう場合と、この二つの場合があるということである。そして、前者の場合には、当然のことながら、「売春」行為とはならず、後者だけが、いわば「売春行為」になるということである。

それでは、一般的な「仕事」と、いわゆる「風俗的な仕事」との決定的な違いは、一体、どこにあるのかと問えば、もちろん、いろいろなものがあるだろうが、その一つとして、それは、一般的な「仕事」では、どうしても限られた収入しか手にすることはできにくい。一方、「風俗的な仕事」の場合には、まとまったお金を短期間で一気に手にすることが可能であるということである。例えば、もし「一般の仕事」と「風俗の仕事」とが同じような収入であるならば、多くの女性たちは、好んでそのような「場」で働くことを、心の底から望むだろうか？ もし「心の底から望む」ということであれば、それは、根っからそういう「場所」が好きだということであり、それは、その人にとっては、まさに「天職」ということになるのかも知れない。

三、結論

さて、「売春」行為とは、すなわち、「お金を得るため」の一つの手段であり、しかも、ある程度まとまったお金を短期間で一気に手にするためのかなり有効な手段の一つであるということである。それ以外のもつともらしい説明は、すべて無意味な説明になるかと思う。そして、そのようなことが可能になるためには、どうしても「富める人たちが不可欠であり、そのような人たちがいて、しかも、できるだけ高く買ってくれる人たちがいて、はじめて「まとまったお金を短期間で一気に手にすることが可能になる」ということである。もちろん、それら「二つのもの」だけでは、まだ不十分であり、それらに加えて、もう一つ、この「二つのもの」（つまり「買う側」と「売る側」と）がめぐり逢うための「場」というものが、どうしても必要不可欠になって来るかと思うが、その「場」を提供してくれるものとして、古くは「売春宿」、そして、今日では「風俗店」、あるいは「インターネット」なども、そのような「場」に十分になり得るということである。

それでは、なぜそのような「場」を提供するのかと言えば、それは、言うまでもなく、そこには「大きな金が流れ込む」からであり、それ以外の理由も、まったく意味をなさない。というのも、「大きな金が手に入らない」どころか、逆に「赤字」になるようであるならば、誰も好んでそのような「場」を提供しようとはしないだろう。

つまり、「売春」というのは、「買う側」とっては、手っ取り早く自分の「性欲」を

満たすことができるという利点があり、一方、「売る側」と「場」を提供する側には、手っ取り早く「お金を手にすることができる」という利点があるということである。それ以外、基本的には何もないということである。そして、この三者の「利害」がうまくかみ合った時に、はじめて「売春」という行為は、成立するとともに、この三者の「利害」が、うまくかみ合わずもつれた時には、実に様々な「揉め事」が発生することにもなるということである。

それでは、なぜ悪いとされていることを敢えて行なおうとするのかと言えば、それは、それほどまでにわれわれ人間の「性欲」というものは、どこまでも根強い「根源的なもの」であるとともに、一方、生きるためにはどうしても「お金」が必要不可欠であるという、もう一つの根源的な「理由」以外、いかなる理由もないのである。だからこそ、人類の歴史とともに、この問題は、決して途絶えることがないとともに、この問題を「完全なる形」で解くことが、なかなかできにくい理由の一つにもなるのだろう。それほどまでにこの問題は、われわれ人間の最も根源的な「問題」とどこまでも深く関わってくる問題であり、それゆえ、イエス・キリストも、そのような場面に直面した時に、まさに「黙するしかなかった」ということにもなるのだろう。

*

*

愛着、作者と作品、芸術鑑賞

はじめに

さて、今回の『愛着』について、作者と作品、芸術鑑賞』というものは、次のような内容のものであり、――まず、「愛着」であるが、例えば、われわれの身のまわりには、もう実に色々なものや活動などに満ちあふれているわけだが、毎日、われわれは、それらのものと「関わり」を持ちながら生きていくわけである。しかし、ただ単にそれらと「関わり」を持ちさえすれば、それだけですぐにその対象に「愛着」が生じるというものでもなく、やはり、その対象とある程度「慣れ親しむ」ということがあって、初めて、その対象への「愛着」というものは、生じて来るものである。それでは、ある程度、「慣れ親しむ」ということがあれば、すべて、その対象に「愛着」というものが生じて来るのかと問えば、もちろん、そうではなく、やはり、その中でも、「特に気に入っているもの」(或いは「楽しい思い出や懐かしい思い出につながるようなもの」)にこそ、いわゆる「愛着」というものは、はつきりと生じて来るものである。

一方、「作者」と「作品」との関係であるが、それは、まさに「親」と「子」との関係であり、母親は、自分の「胎内」で次第に「熟してきたもの」を外に「生み出す」ことになるが、それと全く同じように、作者の「頭の中」(或いは「心の中」)で次第に「熟してきたもの」を外に「生み出す」ということであり、そして、そのようにして生み出されたものが、まさに「作品」ということである。――そして、「作品」というのは、間違いなく、作者の「思惟内容」(つまり様々な「思いや考え+漠然としたもの」)から生み出されて来るものであり、それゆえ、「芸術鑑賞」とは、すなわち、最終的には、その「作品」が生み出された時の作者の「思惟内容」(つまり様々な「思いや考え+漠然としたもの」)へと「遡さかのぼることに他ならない」ということである。その他、そのような内容であり、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

平成二十九年十二月吉日 (統合編)

如月翔悟

目次

はじめに

愛着について

- 一、 音楽
- 二、 子供の頃
- 三、 食べ物
- 四、 言葉
- 五、 映画
- 六、 人物
- 七、 洋服
- 八、 道具
- 九、 趣味
- 十、 愛するもの
- 十一、 執着
- 十二、 結び

作者と作品

序、芸術鑑賞

- 一、 鑑賞の仕方
- 二、 音楽鑑賞
- 三、 古典芸能
- 四、 四つの要素

*
*

愛着

愛着について

例えば、われわれの身のまわりには、もう実に色々なものや活動などに満ちあふれているわけだが、毎日、われわれは、それらのものと「関わり」を持ちながら生きているわけである。しかし、ただ単にそれらと「関わり」を持ちさえすれば、それだけですぐにその対象に「愛着」が生じるというものでもなく、やはり、その対象とある程度「慣れ親しむ」ということがあって、初めて、その対象への「愛着」というものは、生じて来るものである。それでは、ある程度、「慣れ親しむ」ということがあれば、すべて、その対象に「愛着」というものが生じて来るのかと問えば、もちろん、そうではなく、やはり、その中でも、「特に気に入っているもの」(或いは「楽しい思い出や懐かしい思い出につながるようなもの」)にこそ、いわゆる「愛着」というものは、はつきりと生じて来るものである。

例えば、われわれは、毎日、望むと望まざるとに関わらず、実にいろいろな「音楽」を耳にしていることになるが、それは、言葉を換えれば、われわれは、もう毎日、実にいろいろな「音楽」と何らかの意味で「関わっている」ことになるのである。とは言え、もちろん、われわれは、それらすべての「音楽」に興味や関心を示すわけではないだろう。やはり、その人にとって何らかの意味でその人の心が動いた時に、その「音楽」に興味や関心を示すことになるのだろう。——つまり、初めてその「音楽」を聞いた時から、はつきりと心が動く場合と、何回か聞いているうちに、やがて、その「音楽」に心惹かれるようになる場合とがあるかと思うが、そのどちらの場合であれ、何らかの「興味や関心」を示せば、もう一度、その「音楽」を聴きたくなるとともに、そのようなことが度重なることによつて、その「音楽」との関わりも、それだけ深くなつていくものである。それが、すなわち、その「音楽」と「慣れ親しんでいる段階」であるとともに、その「音楽」の「内容」を、より深く理解しようとしている段階でもあるわけである。

さて、その「音楽」が、その人にとってそれほどでもなければ、やがて「興味や関心」はうすれていくだろうが、一方、その「音楽」が気に入れば気に入るほど、さらに何度も、その「音楽」を聴くようになるだろうし、また、カラオケなどで、みずから歌ってみることも多くなり、それだけ、その「音楽」とは、より深く「慣れ親しむ」ことになるわけである。そうなれば、その「音楽」の「曲や歌詞」などが、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)にはつきりと「記憶保存」されるだけではなく、それを歌っている歌手の「顔の表情や身ぶりあるいは歌い方の癖」なども、一緒に「記憶保存」されることになるのだろう。そして、カラオケなどでみずから歌うような時には、その歌手の「物まね」などをして歌うことも、非常に多くなるかと思う。

それでは、その「真似る」ということに、一体、どういう意味があるのかと問えば、それは、「真似る」ことは、すなわち、「学ぶ」こととほとんど「同意語」であり、歌っている歌手の「顔の表情や身ぶりあるいは歌い方の癖」などを、すべて本物そっくりに真似て、その人になりきつて歌うことによつて、ただ単に外から見聞きしていた時には、まったく気づかなかつた、実に様々なことを、まさにわが身に感じて、実感として感じ取ることができるようになることである。——例えば、歌詞の一つ一つの意味が、より深く実感として理解できるようになるとともに、歌っている歌手の「歌い方の様々な特徴や微妙な息づかい、また、その時々々の心の微妙な動き」までも、「ああ、なるほど、ここは、

こういう感じ、や思いで歌っていたのか！」と、まさにわが身に感じて、実感として感じ取ることができるといふことである。つまり、ある対象を、そのままそっくり真似て、その対象そのものとなつて、その内面を徹底的に生きてみることは、そのままそっくりその対象（の内面）を実感として理解する「最良の方法」の一つである、ということである。

一、音楽

ところで、好きな「音楽」であれば、いわゆる「CD」などを買ってきて、その買ってきた「CD」などを何度も聴くことになるかと思うが、その買ってきた「CD」を何度も徹底的に聴くことによつて、その買ってきた「CD」で聴いた「音」が、そのままその「音楽」のまさに「原音」として、その人の「頭の中」（或いは「心の中）」にはつきりと「記憶保存」されることになるわけである。そうすると、一体、どういふことが起こるかと言へば、それは、その「音楽」を聴く時には、いつもその人の「頭の中」（或いは「心の中」）に「記憶保存」されている「原音」と比較対照しながら、その「音楽」を聴くようになるということである。——例えば、クラシック音楽などで、ベートーヴェン作曲の交響曲第五番「運命」を、カラヤン指揮・ベルリン・フィルハーモニー管弦楽演奏の「レコード」などで、何度も何度も徹底的に聴いたとすれば、そのカラヤン指揮・ベルリン・フィルハーモニー管弦楽演奏の交響曲第五番「運命」の「音」が、そのまま交響曲第五番「運命」のまさに「原音」として、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）に「記憶保存」されることになるわけである。そうすると、今度、ベートーヴェンの交響曲第五番「運命」を聴く時には、いつもその人の「頭の中」（或いは「心の中」）に「記憶保存」されている「原音」（*モノゾク指揮・ミューゼ管弦楽の「音」*）と比較対照しながら、いわゆる交響曲第五番「運命」を聴くようになるということである。もちろん、いろいろな指揮者やオーケストラなどが演奏する交響曲第五番「運命」を数多く聴くようになれば、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）に「記憶保存」されていた「原音」も、様々な影響を受けて、次第に変化をしていくことになるだろうが、しかし、基本的には、そういうことが言えるのではないかと思う。そして、われわれ人間が、ほんとうの意味で「愛着」を持つのは、まさにその「原音」なのである。

例えば、ある人が、昔であれば、蓄音機などで、その人の好きな「音楽」を何度も何度も徹底的に聴いたとすれば、その人の好きなその「音楽」の「原音」は、まさにその蓄音機から醸し出される特有の「音」であり、それゆえ、今日の「CD」で、同じ「音楽」を聴いたとしても、なるほど、雑音もなく、極めて綺麗な「音」ではあるが、しかし、その人の「心」を本当の意味で真に満たすことにはならないだろう。——なぜなら、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）に「記憶保存」されている「原音」と、その「音」とはぴったりと一致しないからである。それゆえ、どうしてもしっくりとつかない部分が残るとともに、そのしっくりとつかない部分が残るがために、逆に、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）に「記憶保存」されている「原音」とぴったりと合う「音」にめぐり逢いたいという想いにも襲われるわけである。それが、まさに狭義の「愛着」であり、そして、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）に「記憶保存」されている「原音」とぴったりと合うような「音」にめぐり逢えた時にこそ、その人の「心」は、本当の意味で真に

満たされることになるわけである。つまり、「ああ、そうそう、この音だ。私が若い頃に夢中になって聴いたあの時の音だ！」というような感じで、その当時の様々な「想い出」とともに、非常に懐かしく想い出されて来るということである。

二、子供の頃

それは、何も「音楽」だけの問題ではなく、基本的には、その他、すべてのことに言えることである。例えば、子供の頃に、近くの川や池、あるいは田んぼなどで、川ざかなやザリガニなどをアミで捕らえたり、また、カエルやオタマジャクシなどを捕まえたりしたこと、また、近くの雑木林では、カブトムシやクワガタムシなどを捕まえたり、また、セミやトンボなどを捕ったり、あるいは近くの裏山にのぼって、友だちとそこで遊んだりしたこと、また、学校の友だちや近所の子供たちとかくれんぼや鬼ごっこ遊び、また、メンコ遊びやビー玉遊び、あるいはベーゴマなどで遊んだり、さらに凧揚げや独楽廻し、また、竹馬などで遊んだりしたことなど、そういう子供の頃に何度も遊んだ場所や自然の風景というのは、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)にはつきりと「記憶保存」されている、まさに「原風景」であり、それゆえ、例えば、ザリガニ、カエル、トンボ、セミ捕り、また、かくれんぼや鬼ごっこ、メンコ遊び、凧揚げ、独楽廻し、その他、そういう言葉を聞けば、ほとんどの場合、その人が子供の頃に何度も捕ったり遊んだりした、その「原風景」が鮮やかに想い出されて来ると思う。なぜなら、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)にまさに「原体験」としてはつきりと「記憶保存」されているからである。

そして、大人になれば、今度は、大人の立場から、子供たちの遊びを見る時には、必ずその人の「頭の中」(或いは「心の中」)にはつきりと「記憶保存」されている、その「原風景」や「原体験」などと比較対照しながら、子供たちの遊びを見ているとともに、自分が子供だった頃と同じような「遊び方」をしていれば、なぜか非常に懐かしく感じられるものだが、それは、自分自身の「原風景」や「原体験」とまさに一致するからであり、逆に、自分が子供だった頃と違ったように遊んでいる時には、何か違和感を感じたりするのにも、自分自身の「原風景」や「原体験」とどこか一致しないからである。――すなわち、われわれ人間というのは、どうしても自分自身の「原風景」や「原体験」と一致するようなものにこそ、「愛着」というものは感じるものである。もちろん、その場合、「愛着」を感じるのは、その人にとって、何か「楽しい想い出や懐かしい想い出につながるようなもの」であり、逆に、いやな、想い出したくもないようなものに対しては、いわゆる「愛着」が生じるといふようなことは、基本的にはあまりないだろう。

三、食べ物

それは、食べ物や飲み物などに対しても、基本的には、まったく同じことが言えるのではないかと思う。確かに、われわれ人間というのは、新しい「食べ物や飲み物」などに対しては、極めて強い「好奇心」を示すものであるが、一方、われわれ人間というのは、いわゆる「慣れ親しんだもの」(或いは「慣れ親しんでいるもの」)、その中でも、「特に気に入っているもの」に対しては、はつきりと「愛着」を示すものである。例えば、いわゆる

る「おふくろの味」というものがあるが、それは、いったいどういうものかと言えば、それは、子供の頃から、母親が味つけをした料理を、ずっと食べ続けければ、当然のことながら、母親が味つけをした様々な料理にすっかり「慣れ親しむ」ことになるとともに、その「慣れ親しんだ料理（味）」のなかでも、「特に気に入っている料理（味）」こそは、まさにその人の「頭の中」（或いは「心の中）」にはっきりと「記憶保存」されている。「おふくろの味」ということになるのだろうか。もちろん、広い意味では、母親が味つけをしたすべての料理が、すなわち、「おふくろの味」ということになるのかも知れない。

それはともかく、やがて、その人が大人になった時に、いわゆる「おふくろの味」が恋しくなるのは、一体、なぜなのか？ それはもちろん、その当時のいろいろな「懐かしい思い出」と深く結びついているからであるが、それとともに、その人の「頭の中」（或いは「心の中）」にはっきりと「記憶保存」されている、まさに「深く慣れ親しんだ味」への郷愁（つまり「愛着」ということになるのだろう。それに加えて、若しもその人が「或る味」にこだわる場合には、必ずその人の「頭の中」（或いは「心の中）」には、まさにその「或る味」というものが、はっきりと「記憶保存」されていて、その「或る味」にぴったりと合うようなものを、まさに求めていることになるのだろう。そして、その「或る味」とは、基本的には、その人にとって「特に気に入っている味」ということにもなるのだろう。さらに、プロの料理人ならば、より「新しい味」（理想の味）というものを探し求めることも多いかと思うが、例えば、ラーメンならラーメンの、これこそ、まさに「究極の味」というような、それをプラトン風に言えば、まさにラーメンの究極の「一なるもの」（それは「ラーメンのイデア」）を愛し求めるということにもなるのだろうか。

四、言葉

一方、「言葉」にしても、乳幼児の頃から、毎日、毎日、絶えず耳にし、また、それを幼児の頃から、使ってきた「言葉（日本語）」こそは、われわれ日本人の「頭の中」（或いは「心の中）」にはっきりと「記憶保存」されている、まさに「原音（母国語）」であるが、その中でも、その人が生まれ育った郷土の「言葉（つまり方言）」こそは、その人にとっては、最も「深く慣れ親しんだ言葉」（つまり「原音」）になるわけである。それゆえ、その人は、その郷土の「言葉（つまり方言）」については、極めて微妙なニュアンスまで感じ分けることができるとともに、地方から都会へと出て、その都会で、自分が生まれ育った郷土の「言葉（つまり方言）」などを耳にすると、なぜか非常に懐かしい思いに襲われるのも、乳幼児の頃から、どこまでも深く「慣れ親しんできた言葉（方言）」にこそ、われわれ人間というのは、はっきりと「愛着」を感じるものだからである。それは、日本から海外へと出て、どこかの外国で生活をするようになれば、なおさらに、そのことをはっきりと実感することになるかと思う。

例えば、海外への留学であれ、あるいは仕事上での単身赴任であれ、今までとは全く違った、すべてが外国語の環境のなかで、一人で生活するようになれば、当初は、どうしても相手との「意志疎通」という点で、日本語の時のような思う存分の「意志疎通」というものは、なかなかできにくいとともに、ストレスもたまりやすいかと思う。そのような時に、日本語の話せる人間にめぐり逢えれば、何か救われたような思いに襲われるだろうし、

また、日本語のラジオ放送とかテレビ番組（ビデオ）などを見聞きすれば、なにか非常に懐かしい思いに襲われるとともに、自分が間違いない「日本人」であることをはっきりと思ひ知らされることにもなるのだろう。また、日本語の話せる人間のなかでも、外国人よりは日本人、日本人のなかでも同じ郷土の人、その「郷土の言葉（つまり方言）」などにめぐり逢ったりすれば、それこそ、もう「涙が出るほど懐かしい」という思いに襲われるだろうし、ましてや、それが家族の「言葉（声）」であったりすれば、もう感極まって、涙があふれ出て止まらないような「精神状態」に深く襲われるものではないかと思う。それは、なぜかと言えば、それは、乳幼児の頃から、どこまでも「深く慣れ親しんだ言葉（原音）」であり、そのどこまでも「深く慣れ親しんだもの」にこそ、われわれ人間というのは、はつきりと「親近感」（或いは「愛着」というものを感じるものだからであるとともに、そのどこまでも「深く慣れ親しんだもの」にめぐり逢った時にこそ、その人の「頭の中」（或いは「心の中）」にはつきりと「記憶保存」されている、まさにその「原形（記憶）」とどこまでも深く「共感・共鳴」している「心的状態」でもあるからである。

五、映画

例えば、若い時に、ある「映画」を観て、非常に感動した場合、その感動した「映画」は、その人の「頭の中」（或いは「心の中）」にはつきりと「記憶保存」されるものだが、その「記憶保存」されたものが、その人のその「映画」に対する「原形（記憶）」となるものである。その後、その「映画」を観る時には、必ずその人の「頭の中」（或いは「心の中）」にはつきりと「記憶保存」されている、その「原形（記憶）」と比較対照しながら、観ることになるかと思う。そして、その映画を何回か観ていくうちに、その映画の「内容の理解」をより深めたり、また、新しい発見をしたりすることになるが、それとともに、その人の「頭の中」（或いは「心の中）」にはつきりと「記憶保存」されている、その感動の「原形（記憶）」とほぼぴったりと合う場合には、「やっぱり、いい映画だ、ほんとうにいい映画だなあ」という感じで、どこまでもその「共感・共鳴」をより深めることになるかと思うが、一方、その感動の「原形（記憶）」と次第にズレが生じ、そのズレがだんだんと大きくなるに連れて、その「映画」への「思い入れ（熱）」というものも、次第に弱まっていくのが、ふつう一般的ではないかと思う。

ただ、ここで最も大事なことは、そのために、最初に観た時の「感動」まで消えてなくなるということ、決してないのである。それどころか、最初に観た時の「感動」とその「原形（記憶）」は、その人の「頭の中」（或いは「心の中）」に忘れられない「想い出」として、いつまでも「記憶保存」されていくものである。なぜなら、その時、その人は、何歳で、何月の何日の、天候は何で、どこかの何という映画館で、誰とどういう「心的状態」の時に、誰が主演の何という映画を、どのような気持ちで観たのか、そういうただ一度限りの「絶対的な時間と空間と状況」のなかで観たものであり、そのような「記憶」は、それだけ「より鮮明に」なりやすいということである。それが、まさに映画館で観る場合と、テレビ（或いはDVD）などで観る場合との、「決定的な違い」の一つなのである。

六、人物

例えば、若い頃に、プレスリーならプレスリーに夢中になった人は、そのプレスリーの「音楽や歌う姿」などが、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)にはつきりと「記憶保存」されているものだが、その場合、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)にはつきりと「記憶保存」されて、いわゆる「原形(記憶)」となるものは、いったいどういうものかと問えば、それは、やはり、ライブ・ステージをはじめ、映画、テレビ(ビデオ)、ラジオ、雑誌、その他、何であれ、その人の心が激しく動いた、印象のより強いいろいろな「場面」や、何度も繰り返し「レコード」などで聴き入った「音(原音)」などが、その「主たるもの」になるかと思う。というのも、印象の弱いものなどは、どうしても次第に忘れてしまうものだからである。そして、ひとたび、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)に、いわゆる「原形(記憶)」として、しっかりと「記憶保存」されてしまえば、もう容易なことでは、その「原形(記憶)」がうすれるということではなく、いつまでもはつきりと「記憶保存」されていくことが多いかと思う。

そして、今なおプレスリーの「熱狂的なファン」というのは、実際のプレスリーが、いったいどういう人間だったということよりも、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)にはつきりと「記憶保存」されている、まさにその「原形(記憶)」の中のプレスリーこそ、何よりも愛しているということである。すなわち、各人それぞれの「頭の中」(或いは「心の中」)にはつきりと生きている「プレスリー」を愛しているのであり、実際のプレスリーを愛しているのかどうかは、また、別の問題になるということである。

例えば、マリリン・モンローが大好きだという時、それは、主に「スクリーンのなかで見たマリリン・モンロー」が大好きなのであり、実生活上のマリリン・モンローを好きになれるかどうかは、また、別の問題になるだろう。つまり、「熱狂的なファン」というのは、どちらかと言えば、「実像」(実際のあるがままの姿)よりも、むしろ「虚像」(そうあってほしい姿)あつてほしい姿)の方を愛しているのである。なぜなら、「虚像」(そうあってほしい姿)の方にこそ、プレスリーが、まさにプレスリーとして、また、マリリン・モンローが、まさにマリリン・モンローとして、最も「理想的な形」で、まさに生き生きと「最も魅力的に躍動(活動)」している姿を、はつきりと見せてくれているからである。

七、洋服

それはともかく、われわれ人間というのは、もちろん、この世にあるあらゆるものに「愛着」を持つわけではなく、そのなかでも、その人が何らかの意味で関わりを持ち、それなりに「慣れ親しんだもの」であるとともに、「特に気に入っているもの」(或いは「懐かしい思い出につながるようなもの」)にこそ、はつきりと「愛着」というものを感じるということである。例えば、ある人が、デパートなどで、洋服なら洋服を気に入って買っただけでは、まだその「洋服」に「愛着」が生じるということはないだろう。やはり、その「洋服」を実際に着てみて、初めてその「洋服」が自分に合うか合わないかを実感することになるわけだ。そして、もし、その「洋服」が自分にあまり合わなければ、その「洋服」を着る機会も、自然と少なくなるだろうが、一方、その「洋服」が自分でも気に入り、また、他人からも似合うじゃないかと言われるれば、当然、その「洋服」を着る機会も

自然と増えるかと思う。それが、すなわち、その「洋服」と「慣れ親しんでいる状態」であるとともに、その「洋服」を着て、友だちや恋人、その他、誰とであれ、楽しい時を過ごしたとか、どこどこに行ったとか、その他、そういう何か楽しい「思い出」など結びついてくれば、なおさら、その「洋服」というものに対して、「愛着」というものが、はっきりと生じて来るものである。ましてや、それが、職業上であれ、趣味であれ、その他、何であれ、その人にとって、心から気に入っている「洋服や制服あるいはユニホーム、その他」などであれば、なおさらに、それへの「愛着」というものは、より深い「愛着」（つまり狭義の「愛着」）になっていくことが、非常に多いということである。

八、道具

例えば、われわれは、仕事上であれ、趣味であれ、その他、何であれ、様々な「道具」類を使うことは、非常に多いかと思うが、その場合、まず、どういう「道具」を求めるかと言えば、基本的には、よりよい「道具」を手に入れたいわけである。というのも、「道具」が悪ければ、思うような仕事は、できにくいからである。とは言え、もちろん、買ったばかりの真新しい「道具」では、まだその人の手に十分になじんでいないために、どうしてもしつくりといかないところがあつて、使いづらいわけだが、やがて、何度も何度も使つて、「慣れ親しんでいく」うちに、次第にその人の手にしつくりとなじむようになり、そうなることによつて、初めて、その人の手の一部のようにしつくりと合つた「道具」になるということである。それが、まさに使い込んだ「道具」であり、その使い込んだ「道具」のなかでも、特に、お気に入りの「道具」となっているものにこそ、いわゆる、より深い「愛着」というものを感じるようになるということである。

例えば、スポーツの「用具」などにしても、買ったばかりの「真新しいもの」は、まだその人の「手や身体」に十分になじんでいないために、どうしてもしつくりといかないところがあつて、使いづらいわけであるが、やがて、何度も何度も使つて、どこまでも深く「慣れ親しんでいく」うちに、次第にその人の「手や身体」にしつくりとなじむようになり、そうなることによつて、初めて、その人の「手や身体或いは心魂」にぴったりと合つた「道具」になるわけである。それが、まさに使い込んだ「用具」であり、その使い込んだ「用具」というのは、まさにその人自身の「用具」となっているものである。それゆえ、その使い込んだ「用具」は、その人にとっては、極めて大事なもので、あるいはかけがいのないものであり、それゆえ、それを失うということは、極めて大きな「ショック」であるとともに、極めて大事なものを失つたという「喪失感」に強く襲われるものである。それが、まさにより深い「愛着」（つまり狭義の「愛着」）ということになるわけである。

九、趣味

例えば、最近では、いわゆる「カラオケ」が大変なブームになっているかと思うが、その場合、その人が今までに「慣れ親しんだすべての曲」に対して、すべて同じように「愛着」を持つということではないだろう。やはり、その人が「慣れ親しんだ数多くの曲」のなかでも、「特に気に入っているもの」（或いは「楽しい思い出や懐かしい思い出につな

がるようなもの」にこそ、より強い「愛着」を感じるものであり、それが、すなわち、一般的な「愛着」よりは、より深い「愛着」（つまり狭義の「愛着」ということであり、それは、その人にとって極めて大事なもの、あるいはかけがいのないものとして、その人の「心の中」では、いわば「ベスト10」の中に入るようなものになるのだろう。

例えば、それは、様々な「ゲーム」などでも、まったく同じことであり、その人が、今までに「慣れ親しんだすべてのゲームソフト」に対して、すべて同じように「愛着」を持つということではないだろう。やはり、その人が「慣れ親しんだ数多くのゲームソフト」のなかでも、「特に気に入っているもの」（或いは「楽しい、思い出や懐かしい、思い出につながるようなもの」にこそ、より強い「愛着」を感じるものであり、それが、すなわち、一般的な「愛着」よりは、より深い「愛着」（つまり狭義の「愛着」ということであり、それは、その人にとって極めて大事なもの、あるいはかけがいのないものとして、その人の「心の中」では、いわば「宝もの」のようになっていているものである。それゆえ、その人にとつて、それを失うことは、大変な「ショック」であるとともに、極めて大事なものを失ったという「喪失感」に強く襲われることにもなるかと思う。ましてや、それが、その人にとつて、より大事な「愛車、愛蔵品、マイホーム、さらに、植物（園芸品）、動物（愛玩動物）、そして、人間（家族）、その他」ということになれば、なおさらのことである。

十、愛するもの

例えば、その人が、何よりも大事にしている「愛車」などを傷つけられたり、盗まれたりすれば、もう大変な「ショック」に襲われるだろうし、ましてや、長期のローン組んでやつとの思いで手に入れた「マイホーム」などを火事などで焼失したりしたら、それこそ、もう全身から力が抜けていくような大変な「ショック」を受けるとともに、極めて大事なもの（或いはかけがいのないもの）を失ったという「喪失感」に強く襲われるだろうし、あの時、もう少し気をつけていたらという後悔の念に強く襲われることにもなるのだろう。また、その人が、毎日、手を加えて、心から大事にしていた「園芸品」などを枯らしたり、盗まれたりすれば、やはり同じような思いに襲われるだろうし、ましてや、長年、愛情を持って、どこまでも深く慣れ親しんだ「愛玩動物」などを失えば、それこそ、まるでわが子を失った時のような大変な「ショック」を受けるとともに、何物にも換え難いものを失ったという「喪失感」と「哀惜の情」に強く襲われることにもなるわけである。さらに、われわれ人間にとつて、例えば、親であれ、子供であれ、兄弟（姉妹）であれ、あるいは夫や妻であれ、その他、もう誰であれ、どこまでも深く慣れ親しんだ「家族」の一人を失うことは、まさに人生最大の「悲しみ」のひとつであり、その時には、何か「心の中」で確かなものが音を立てて崩れていくような大変な「ショック」を受けるとともに、何者にも換え難い「唯一無二のもの」を失ったという極めて強い「喪失感」と「哀惜の情」にどこまでも深く襲われることにもなるわけである。それは、その人のその対象への「愛着（愛情）」の深さにほぼ正比例して、それだけより深い「喪失感」と「哀惜の情」（或いは「愛惜の情」）に強く襲われることになるということである。

ところで、「愛着」というのは、いわゆる「執着」とともに、仏教上の言葉では、われわれ人間を苦しめる「煩惱」の一つではあるが、その「愛着」と「執着」とはほとんど同じような「意味合い」のものであり、それゆえ、その「微妙な違い」をはっきりと感じ分けることは、極めて難しいように思われがちであるが、しかし、意外にそれほど難しいことではなく、基本的には、誰でも容易に感じ分けることができるものではないかと思う。

それでは、「愛着」と「執着」との違いは、一体、どこにあるのかと問えば、それは、「愛着」というのは、対象への「愛情と思慕」であり、一方、「執着」の根底にあるものは、対象への「欲望と情念」である。——つまり、「愛着」というのは、本来、その対象への強い「愛情」から生じるものであり、それゆえ、その対象への「欲」は、比較的少ないものであるが、一方、その「欲」がだんだんと強くなるにつれて、それは、「愛着」から「執着」へと変化していくものであり、それは、その人自身の「心の中」でも、はつきりと自覚できるものではないかと思う。

例えば、あの人がまるで「宝もの」のように思っているものを、それを非常に高いお金で売ってくれないかと言われた時に、その人は、一体、何と答えるだろうか？ 恐らく、その人は、いや、いくらお金を積まれても、これだけは、売るわけにはいかない、と答えるだろう。そして、そう答えるその人の「心の底」にある思いこそは、まさにその人のその対象へのより深い「愛着」（つまりより深い「愛情や思慕」ということになるわけだ。

——例えば、先祖代々の「土地」を売ってくれないかと言われた時に、いや、この土地は、いくらお金を積まれても売るわけにはいかないという時、それは、その「土地」への単なる「執着」などでは決してなく、むしろ、より深い「愛着」（つまりより深い「愛情や思慕」ということになるわけである。一方、その「土地」を何が何でも手に入れたいという思いこそは、まさに「執着」であり、その「執着」の根底にあるものは、やはり「欲望や情念」ということになるかと思う。

つまり、われわれ人間が、ある対象により、深い「愛着」（つまりより深い「愛情や思慕」）を真に寄せている場合、その対象は、その人にとって極めて大事なもので、あるいはかけがいのないもの、また、心の底から思いを寄せていて、まさに「宝もの」のように感じ、何物にも換え難いものであつて、それゆえ、それを失った時には、その人は、極めて大きな「ショック」を受けるとともに、もう何物にも換え難いものを失ったという極めて強い「喪失感」に襲われるものである。それは、その対象にどのくらい深い「愛着」（つまりどのくらい深い「愛情や思慕」）を寄せているかにほぼ正比例して、それだけより深い「喪失感」と「愛惜の情」に強く襲われるということである。

ちなみに、われわれ人間には、いわゆる「収集癖」というものがあるが、それこそ、まさに「執着」ではないかということになるが、確かに、それは、一種の「執着」であり、何が何でも手に入れたいという「欲望や情念」でもあるわけである。つまり、何かを手に入れたいというのは、基本的には、すべて「欲」になるわけである。一方、いわゆる「愛着」が生じるためには、その対象と「慣れ親しむ」ということが、どうしても「必要不可欠」であるとともに、そのなかでも、「特に気に入っているもの」（或いは「楽しい思い出や懐かしい思い出につながるようなもの」）にこそ、まさにより深い「愛着」（つまり

より深い「愛情や思慕」が、はつきりと生じて来るものである。それゆえ、「収集」というのは、最初は、どうしてもそれを手に入れたという「執着」（「欲望や情念」）から始まることが多いかと思うが、しかし、一たび、それが、自分の手に入れば、今度は、それと「慣れ親しむ」という段階になり、その「慣れ親しんだ数多くの収集品」のなかでも、「特に気に入っているもの」（或いは「懐かしい思い出につながるようなもの」）にこそ、まさにより深い「愛着」（つまりより深い「愛情や思慕」）が、はつきりと生じて来るとともに、それは、その人にとって極めて大事なものであるいはかけがいのないもの、また、心の底から思いを寄せていて、まさに「宝もの」のように感じ、何物にも換え難いものであつて、それゆえ、それを失った時には、その人は、極めて大きな「ショック」を受けるとともに、もう何物にも換え難いものを失ったという極めて強い「喪失感」と「愛惜の情」に深く襲われるということである。それは、その人が、その対象に対して、どのくらい深い「愛着」（つまりどのくらい深い「愛情や思慕」）を寄せているかにほぼ正比例して、それだけより深い「喪失感」と「愛惜の情」とに強く襲われるということである。

十二、結び

最後に、もう一度、いわゆる「原風景」と「原体験」について、考えてみたいと思うが、例えば、ある人が生まれ育った「郷土」というのは、その人がまさにどこまでも深く「慣れ親しんだ土地」であり、それゆえ、その郷土の「町の様子や自然の風景」（或いはそこでの様々な「体験や経験」）などは、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）にはつきりと「記憶保存」されているものであるが、その「記憶保存」されているものは、まさにその人の郷土の「原風景」となるものである。やがて、その人が、都会などに出て、そこで何年も生活するようになってから、久しぶりに「郷土」に帰ってきた時に、その人が、まず感じることは、「……ああ、ずいぶん変わったなあとか、あるいは昔とちつとも変わっていないなあ」ということになるかと思う。それは、一体、何を意味するのかと言えば、それは、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）にはつきりと「記憶保存」されている、その郷土の「原風景」と、現在の「郷土の様子」とをまさに「比較対照」しながら見ているということである。そして、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）にはつきりと「記憶保存」されている、その郷土の「原風景」こそは、まさにその人の《心の「故郷」》であり、それは、現実の「故郷」がたとえどのように「変化・変貌」しようとも、そういうこととは全く関係なく、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）で、一生涯、変わることなく生き続ける、まさに《故郷》の「原風景」そのものになるということである。そして、何々と聞いて、その人の「頭の中」（或いは「心の中」）にいつもはつきりと思い浮かんで来る「記憶」こそは、まさにその人のその「対象」（事柄）に対する「原形（記憶）」であるとともに、その人のまさにその「対象」（事柄）に対する「体験（経験）（記憶）」でもあるということである。

*

*

作者と作品

作者と作品について

例えば、自分の「頭の中」（或いは「心の中」）に内在する様々な「思いや考え＋漠然としたもの」と、その出来上がった「作品」とがぴったりと一つに重なり合えば、それが、まさに「完成」の状態であるが、しかし、それが少しでも「ズレ」ていれば、その「作品」は、その作者にとっては、真の「完成品」とはならず、それゆえ、そのことがいつも「頭の中」（或いは「心の中」）に残っていて、この「部分」さえできれば、すべて完成なのに、と、その作者をしていつまでも悩まし続けることになるかと思う。

それでは、このことはいったい何を意味するのかと言えば、それは、次のようなことである。つまり、われわれ人間が何か「ものを創ろう」とする場合には、必ず、まずその人の「頭の中」（或いは「心の中」）でその「創ろうとするものをイメージ」することになるかと思う。もちろん、その「イメージ」は、一から十まですべてはつきりとしているものではなく、多くの漠然とした想いもたぶんに含まれていて、その人自身にもよく分からない部分があつて、それは、実際に「ものを創っていく過程」で次第に漠然としていた部分もはつきりとして来ると同時に、最初に、その人が「イメージ」（つまり「最初に考えたり想ったりしたもの」とは、かなり違ったものになることも極めて多いわけである。それは、なぜかと言えば、それは、まさに「ものを創りながら新たにあれこれ考え深めている」からである。それゆえ、最初に、その人が「イメージ」したものはかなり違ったものになるとともに、出来上がったものを見ていちばん驚いているのは、誰でもない「作者自身」ということも極めて多いことである。

それでは、そのことをもう少し深めて考えてみたいと思う。例えば、われわれは、「自分を知る」方法としては、まず、自分自身をよく観察して、自分とはあれこれこういう性格であるとか、大体こういう人間だとかという、そういうその人なりの「自己認識」を持っているかと思う。しかし、それは、その人にとって自覚できる「自分」に対しての認識であり、それゆえ、その人自身にも自覚できない「もっと深奥にある本来の『自分自身』」というものを知ることにはできない。それではどうすれば、自分にさえ自覚できない「もっと深奥にある本来の『自分自身』」とめぐり逢うことができ得るのだろうか？ もちろん、それにもいろいろ方法があるかと思うが、その一つの「方法」として、いわゆる「ものを創り出す」（つまり「創作活動」）というものがあるかと思う。

つまり、ものを創り出す過程というのは、ここはこういうふうにしたほうがよいとか、ここはどうしてもこうでなければならぬということや無限に積み重ねることであり、そして、そのようなことを無限に積み重ねることによって、やがてその人の「心の中」に内在する様々な「思いや考え＋漠然としたもの」と、その出来上がった「作品」との間にこれという「ズレ」がなくなり、いわばぴったりと一つに重なり合うような状態に達した時に、まさに「これでよし！」という「完成」の状態になるかと思う。そして、その過程での「ここはどうしてもこうでなければならぬ」という微妙な感じとか、また、自分の心とどうしてもぴったりと一つに重なり合わない微妙な（ズレ）を感じている「ようなところ」こそ、ふだんその人自身でも自覚できない「もっと深奥にある本来の『自分自身』」が、その「姿」をはつきりと見せているということである。——つまり、その人自身にもどうにもならないその人自身の本質的な「色、音、形（造形）、言葉、その他」などとともに、

その人ならではの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが、自ずと現出することにもなるということである。

もちろん、ものを創り出すという行為は、そのまま新しい「自分」を創り出すことにもつながるものである。それゆえ、「作品」とは、その人がどんどん大きく「内的成長」していくために、何度も脱皮していったいわば「抜け殻」的なものとも言えるものであるとともに、「作品」とは、その作品が生み出されたその当時のその人の「内的状態」が如実に表れているものである。したがって、過去に生み出された様々な自分の「作品」を見れば、その当時の自分の「内的状態」（或いは「内的成熟度」）がどの程度のものであったかがあきれるほどよく分かるということである。——それゆえ、月並みのものばかりを創り出している人は、いつまで経っても、「月並みの自分」しか創り出せないことになるし、また、その人の生み出した「作品（抜け殻）」を見れば、その人の「内的成熟度」が、どの程度のものであるかは容易に分かるものである。

それでは、「作者」と「作品」との関係は、一体、どういうものかと問えば、それは、まさに「親」と「子」との関係である。つまり、母親は、自分の「胎内」で次第に「熟してきたもの」を外に「生み出す」ことになるが、それと全く同じように、作者の「頭の中」（或いは「心の中」）で次第に「熟してきたもの」を外に「生み出す」ということであり、そして、そのようにして生み出されたものが、まさに「作品」ということになるわけである。——例えば、人間の「赤ん坊」は、親の「遺伝子」をしっかりと受け継いでこの世に生まれて来るものであるが、一方、「作品」は、その作者の「遺伝子」（その人の本質的なもの）をしっかりと内に宿して生み出されるものである。それゆえ、確かに、「子供」や「作品」というのは、まさに親の「似像」ということになるかと思うが、しかし、それは、完全に「一体化する」ものではない。

なぜなら、「作品」というのは、その時々の作者の「思惟内容」の「外的表現」であり、従って、「作品」が生み出された時の「内的状態」と、その「作品」とはたとえ「一体化」するとしても、作者の「内的状態」というのは、どんどん「変化・成長」していくものだからである。それゆえ、現在の作者の「内的状態」というのは、過去の様々な「内的状態」を踏まえて大きくなったものであり、従って、本来、「親（作者）」のほうが「子供（作品）」より優れていることになるかと思う。もちろん、「作品」のほうが「作者自身」よりも優れているという場合もあるだろうが、しかし、その場合にも、真に優れた「作品」を生み出したということは、その「作品」とともに、作者自身も「内的成長」をしていることになるかと思う。ただ、その人がたとえ「内的成長」していても、例えば、実際の様々な「人間関係」や日常の「言動」などにおいて、人間としていろいろ「未熟な面」を暴露するとしても、それはまた別の問題になるかと思う。

例えば、モーツァルトやベートーヴェンなどは、世界的に認められた真に優れた「作曲家」である。しかし、実際の様々な「人間関係」や日常の「言動」などには、いろいろと問題があったかと思う。それは、一体、どうしてかと言えば、もちろん、音楽の場合には、特に「右脳」の発達が大事になるが、それに加えて、一般的には、次のような理由があるからである。——まず、「作品」を生み出す時には、ふつう他人から離れて、自分一人だけになって、いわゆる「創作活動」に耽っている状態になるかと思う。ということは、様々な人間との直接的な「関わり方」の「上手下手」は、特に関係ないことになるとともに、

ものを創り出す人間の場合には、どうしても「一人で過ごす」時間が多くなるために、いろいろな人間との実践的な「関わり」があまり十分ではない場合には、どうしてもいろいろな場面での「対応の仕方」があれこれぎこちなくなる傾向があるということである。

また、本格的な「思考(思索)活動」や「創作活動」などにどこまでも深く溶け込んで、一種の「没我的状態」になっているということは、日常の様々な「欲望や感情」などに振りまわされているふだんの雑念とした「自我」から離れて、いわゆる超「自我」(つまり「純粹自己」)になって仕事をしている状態であり、そこからこそ、真に優れた「作品や思想」などが生み出されることになるかと思う。——従って、様々な「欲望や感情」などに振りまわされているふだんの雑然とした「自我」の時と、何か真に優れた「作品」が生み出される時の超「自我」(つまり「純粹自己」)の時とは、たとえ同じ人間であっても、かなり違って来るということである。なぜなら、ふだんの「自我」というのは、プラトン風に言えば、「欲望的部分」と「気概(激情)的部分」それに「理知的部分」の、この三つから成り立っているのに対して、超「自我」(つまり「純粹自己」)の時には、「欲望的部分」や「気概(激情)的部分」などから離れて、いわゆる「理知的部分」に全面的に支配されて活動をしている状態であるからである。

むしろ、実際の様々な「人間関係」や日常の「言動」等においても、真に「優れている」のが、まさに「ベスト」ではあるが、しかし、古今東西の傑出した「思想家や芸術家」などの「日常の生活ぶり」というものを見てみても、必ずしもそうっていないのは、一体、どういうことなのか？ それは、彼らがまさに超「自我」(つまり「純粹自己」)になっているような時には、確かに優れた「作品や思想」などが生み出されやすくなるわけだが、しかし、ふだんの「自我」に戻った時には、どうしても様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまうということである。

*

*

それに加えて、例えば、仕事をはじめ、芸術、芸能、スポーツ、趣味、その他、何であれ、何か一つのこと「特化している」ような場合、その分野に関しては専門的な「知識や技術」などをしっかりと身に付けていながらも、その分野(専門)から離れてしまうと、ふつうの人(或いは「ふつうの人以下」)になってしまうというものは、一体、どういうことなのか？ それは、次のようなことである。——例えば、仕事でも、音楽でも、スポーツでも、その他、何であれ、(子供の頃から)、そのことを何年も徹底的に学習し続ければ、やがては、専門的な「知識や技術」などをしっかりと身に付けることになるだろうが、しかし、それは、人間として真に「内的成長(成熟)」することとは、全く全然違うことなのである。それでは、一体、何がどのように違うのかと言えば、それは、何か一つのこと「特化する」というのは、ある一つのことの専門的な「知識や技術」などの習得であり、それは、いわば「道の器用」であり、その「道の器用」というのは、その人の人間としての成熟度とは全く関係なく、本人の努力次第でいくらでも上達でき得るものである。

一方、人間として真に「内的成長(成熟)」するというのは、一つのこと「特化する」ことではなく、人間としての総合的な「内的成長(成熟)度」であり、それは、若い時から極めて旺盛な「知的遍歴」などを経て、つまり、もの凄い「知識欲」(或いは「真善美欲」)などであるが、それこそは、まさに「神的な恋(エロス)」であり、それをプラトン風に言えば、遙か彼方にある「叡知界」(つまり「イデア界」)の方へと想いを寄せ

て、最究極的には「美のイデア」や「善のイデア」などを観て取る地点にまで到達しようとする、そのようなもの凄く「知識欲」であり、そのような極めて旺盛な「知的遍歴」を経ることによってこそ、初めて、物事を極めて厳密に「認識（識別）」でき得るような真の「思考（思索）能力」というものが、しつかりと身につくことになるのである。

それは、つまり、その人の「生まれ育った環境（つまり家庭・学校教育・社会・民族・国家・その他）」などの影響を非常に強く受けて自ずと形成される、その人なりの「もの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などを、あらためて徹底的に「考え直して」みると、今まではそうだと思っていたことも、実はそうではなく、それでは、こうなのかと、次から次へと「考え方」を新たにしていこううちに、今までの価値観や道徳観或いは様々な既成概念などがばらばらに空中分解してしまう、また、自分というあれこれの性格や考え方なども空中分解してしまい、もう何がなんだか自分でもよく分からないような世界に深く陥ってしまうわけであるが、それは、言葉を変えれば、まさに根底からの「自己改革」が起こっている状態であり、そのような「心の状態」から、やがて、真に「内的成長（成熟）」を遂げることによってこそ、初めて、「自らもの考え、自ら判断する自由を得る」ことにもなるわけである。

そして、人間として真に「内的成長（成熟）」することによって、初めて、人間として真に成熟した「もの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などができ得るようになるということである。それは、すなわち、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間になる、ということであるとともに、物事の「真偽、善悪、美醜、価値」判断等もどこまでも厳密にでき得るようになるということである。それに加えて、今までの本能に深く根ざした「価値観や道徳観」から、より開かれた「価値観や道徳観」へと移行するということである。それゆえ、人間として真に「内的成長（成熟）」することによってこそ、初めて、人間として真に成熟した、より客観的で、より普遍的な「もの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などができ得るようになるということである。

*

*

例えば、真に優れた「思想家」などであれば、当然のことながら、その人の「理知的部分」というのは、真に優れているはずであるが、それでは、どうしてそのような真に優れた「理知的部分」を持ち合わせていながら、様々な「欲望や感情」などを自分で想うようにコントロールできないのだろうか？ それには、次のような理由があるからである。

つまり、われわれ人間には、いわゆる「二つの源泉」があり、その一つは、人間以外のほかの動物にもすべて共通した、いわゆる「本能（欲望）的部分」を源泉とするものであり、そして、もう一つは、「人間への進化」の過程において生じてきた、いわゆる「理性的部分」を源泉とするものである。そして、当然のことながら、「本能（欲望）的部分」のほうが「理知的部分」よりも遙かに「根源的なもの」であり、それゆえ、いくら「理知的部分」で様々な「欲望や感情」などを抑えようとしても、なかなか思うようにコントロールできずにどうしても振りまわされてしまうのも、結局は、「本能（欲望）的部分」のほうが遙かに「根源的なもの」だからである。しかし、一方、様々な「欲望や感情」などをしつかりとコントロールできているならば、その人こそは、まさに「理知的部分」に全面的に支配されている人たちであり、例えば、ソクラテスなどは、まさにそのような人であったとい

うことになるかと思う。

それはともかく、生み出された「作品」は、やがて作者の手を離れて、「作品」は、自らの「生命」(生命力)でひとり歩きを始めることになるかと思う。それは、母親の胎内から生まれた「赤ん坊」が、やがて自らの「生命」(生命力)でひとり歩きを始めるのと、基本的には全く同じことになるかと思う。

序 芸術鑑賞

例えば、「作品」というのは、確かに作者の「思惟内容」(つまり様々な「思いや考え」+漠然としたもの)から生み出されるものであり、それゆえ、その作者ならではの「もの」の見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが、その「作品」のなかに反映されているものであるが、しかし、ひとたび作者の手から離れてしまえば、今度は、その作者の「考えや思惑」などとはまた別に、「作品」そのものは、自らの生命力でひとり歩きを始めていくものである。それは、ちょうど母親から生まれた「赤ん坊」が、まさにその親の「遺伝子」をしっかりと受け継いでこの世に生まれて来るものであるが、しかし、ひとたび親の手から離れば、親の「考えや思惑」などはまた別に、その「子供」は、自らの生命力でひとり歩きを始めていくようなものである。

一方、その「作品」を鑑賞する人たちは、どうしてもその人なりの「もの」の見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などを通して、いわゆる「作品」を鑑賞していることになるかと思う。しかし、それでは、その人の「色メガネ」を通して、その「作品」を鑑賞していることになってしまいうだろう。それゆえ、一度、その人の「色メガネ」を取り外した「純粋な眼」で、「作品」そのものを鑑賞することが、何よりも大事なことになるかと思う。なぜなら、そうでなければ、いわゆる「作品」そのものを客観的に鑑賞していることにならないからである。それに加えて、ただ単に「作品」を外からあれこれ「分析的に鑑賞」するだけではなく、さらに、その「作品」のなかに深く溶け入っては、いわゆる内から「厳密に鑑賞する」(例えば、絵画では厳密な「模写」や「修復」などを行なう)ことによって、その「作品」が生み出された時の、まさにその作者のあるがままの「心の状態」(その時の様々な「思いや考え」+漠然としたもの)にまで^{さかのぼ}遡って行くことが可能になるとともに、その作者のほかの作品に対しても、そのような「厳密な鑑賞」を何年も積み重ねることによってこそ、最終的にはその作者自身の最も深奥に内在しているであろう、その人の「中心核」(つまり「魂」そのもの)にまで^{さかのぼ}遡って、それと終には一体となることによって、その作者自身の「中心核」(つまり「魂」そのもの)をわが身に感じて、実感として感じ知ることにもなるということである。それが、まさに芸術鑑賞の「最究極的な目的」の一つにもなるのだろう。

一、鑑賞の仕方

それでは、いわゆる「芸術や芸能」などの「鑑賞の仕方」をもっと具体的に説明してみたいと思うが、その場合、われわれにとってもっとも身近でわかりやすい例としては、例えば、いわゆる「物まね番組」などを見聞きしている時の「鑑賞の仕方」こそは、まさに

「理想的な鑑賞方法」の一つである、ということである。それは、一体、どのような意味合いになるのかと言えば、それは、次のようなことである。

例えば、われわれが、ある歌手の歌を巧みに真似ている人を見聞きしている時には、必ず、「二つのもの」をあれこれ比較対照しながら見聞きしていることになるかと思う。つまり、一つは、われわれの一人一人の「頭の中」（或いは「心の中」）にその人なりに「記憶保存」されている「ある歌手の歌い方」であり、そして、もう一つは、まさに「その歌手を巧みに真似ている人の歌い方」である。そして、われわれは、この「二つのもの」、つまり、「歌手の歌い方と真似する人の歌い方」とをつねに比較対照しながら、その一つ一つをあれこれ「分析的に見聞き」していることになるかと思う。そのように「……つねに比較対照しながら、その一つ一つを分析的に見聞きすること」によってこそ、その歌手の「歌い方」の、実にいろいろな特徴などがはっきりと見えて来るということである。

そして、そのような「方法」が、まさにそのまま「芸術や芸能」などの「鑑賞の仕方」にも当てはまるということである。——つまり、「二つのもの」をつねに比較対照しながら、その一つ一つをより厳密にかつより分析的に見聞きすることによってこそ、今まであまり分析せずに、そのまま素直に見聴きしていた時には全く気づかなかった、実にいろいろなことがはっきりと「認識（識別）」できるようになるということである。——そして、もう一つの「方法」というのは、まさに「自ら物まねを試みるという方法」であり、この「方法」こそは、まさに「最上の方法」になるかと思う。

例えば、カラオケなどで、ある歌手のまねをそれこそ顔の表情から身振り或いは声の出し方その他も何から何まですべて真似て、つまり、その歌手になりきって歌を歌ってみると、今まで、ただ単に「外から見聞きしていた時」には全く気づかなかった、実にいろいろなことが、例えば、その歌手が、「……なぜあのような顔の表情や身振り或いは声の出し方などをする」のかが、まさに手に取るように、「……ああ、なるほど、ここはこういうことだから、こういう感じになるのか！」と極めて微妙なところまで、つまり、その歌手のその時々「心の微妙な動きや息づかい」までも、また、その時々「顔の微妙な表情や身振り」までも、まさにわが身にかけて、実感として感じることができるようになるということである。そして、この「方法」こそは、まさに「内から観る」という方法であり、それは、自らその「対象」になりきって、その「内面」（つまり「内的世界」）を徹底的に生きてみることによってこそ、その「対象」をまさにわが身にかけて、実感として感じることができるということである。（それは、「書写、写経、絵の模写、その他」、すべて同じことである。）

二、音楽鑑賞

それでは、もう少し幾つかの具体的な例を挙げて、それぞれについてわかりやすく説明していきたいと思うが、それは、次のようなことである。

例えば、音楽であれば、クラシック音楽を初めとして、歌謡曲、ポップス、ジャズ、ラテン音楽、シャンソン、民族音楽、その他、実にいろいろなジャンルの音楽があるかと思うが、ここではクラシック音楽（例えば、ベートーヴェンの『月光』というピアノ曲）を例として考えてみたいと思う。——まず、その音楽をまったく知らない人たちであれば、

とにかく一度どういう音楽なのか、そのピアノ曲をCDなどで聴いてみることから始めることになるかと思う。そして、一度その音楽をCDなどで聴いてみて、あまり「心惹かれるようなところ」がなければ、そのまま「興味や関心」はうすれ、再び、聴く機会も少なくなっていくだろう。しかし、一方、どこか「心惹かれるようなところ」があって、何らかの「興味や関心」を持てば、逆に、その音楽をもう一度聴きたくなるだろうし、そのようなことを何度も繰り返しいくうちに、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)には、その「音楽」が、その人なりに「記憶保存」されることになるかと思う。

そして、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)にその「音楽」がどのくらいしっかりと「記憶保存」されるかは、その「音楽」をどのくらいより厳密かつより分析的に聴いたかにほぼ正比例するとともに、その「音楽」(つまり「CDで聴いたベートーヴェンの『月光』というピアノ曲」)こそは、その人にとってのまさにその音楽の「原音」になっ

ていくということである。

例えば、その人が、あるコンサート会場などで、いわゆるベートーヴェンの『月光』というピアノ曲を聴くような機会に恵まれた時に、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)では、一体、どのようなことが起こるかと言えば、それは、次のようなことになるかと思う。――つまり、その人は、ベートーヴェンの『月光』というピアノ曲を、今までに或るCDで何度となく聴いているので、そのCDで聴いたベートーヴェンの『月光』というピアノ曲が、まさに「原音」として、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)にしっかりと「記憶保存」されている状態であるということである。それゆえ、その人は、今、まさに目の前で演奏されているベートーヴェンの『月光』というピアノ曲を聴きながら、その演奏されている「音楽(音)」と、自分の「頭の中」(或いは「心の中」)にしっかりと「記憶保存」されているベートーヴェンの『月光』というピアノ曲の「音楽(音)」とを、まさに「……つねに比較対照しながら、その一つ一つをより分析的に、また、より厳密に聴き分けようとして聴いている」状態にあるということである。そして、それこそは、まさに「音楽鑑賞の言わば理想的な方法」であるということである。

そして、その人がどのくらい「より厳密かつより分析的に聴き分ける」ことができ得るかは、まさにその人の「音楽の諸能力」(つまりその人が「初級段階、中級・上級段階、そして、プロ段階」のどの辺にいるか)にほぼ正比例して、それだけ「より厳密かつより分析的に聴き分ける」ことが、でき得るようになるということである。それゆえ、例えば、その人が「初級段階」であれば、当然のことながら、その一つ一つの音を「厳密に聴き分ける」ことはでき得ず、いわば「全体を一つの音」のように聴いている状態であり、また、「中級・上級段階」になれば、その段階に応じて、より厳密に「音」を聴き分けることができ得るようになるとともに、いわゆる「プロ段階」になれば、もちろん、それぞれ個人差はあるだろうが、その一つ一つの「音」を、どこまでも厳密に聴き分けることができ得るようになるということである。

次に、自分自身が、まさに「歌を歌ったり、楽器演奏を行ったりする場合」であるが、まず、歌を歌うということは、基本的には誰にでもできることであるが、しかし、少しでもうまく歌おうとするためには、どうしてもそれに見合った努力が必要不可欠になって来るとかと思う。それは、楽器を演奏する場合でも全く同じことであり、どの楽器を習うにしても、その人に見合った期間、練習を積み重ねることが、どうしても必要不可欠になって

来るということである。そして、その人が「初級段階、中級・上級段階、そしてプロ段階のどの辺にいるか」にほぼ正比例して、その人の「歌をより厳密に歌う能力」や「楽器をより厳密に演奏する能力」なども、ほぼ決まることになるかと思う。

そして、例えば、ベートーヴェンの『月光』というピアノ曲を、最初から最後まで、楽譜通りに一つ一つの音を可能な限り厳密にピアノで弾き進めれば、それこそ、そのベートーヴェンの『月光』というピアノ曲を、これ以上に深く理解する方法はなく、また、これ以上に、ベートーヴェンの『月光』というピアノ曲を、わが身にかけて、実感として深く感じ知る方法はないということである。つまり、これこれは、まさに「最上の鑑賞方法」であるということである。

三、古典芸能

次に、日本の場合、「古典芸能」というものがあり、それは、能を初めとして、狂言、人形浄瑠璃、歌舞伎、邦楽、舞踊、また、浪曲、講談、落語、その他、もう実にいろいろなものがあるかと思うが、それでは、その「古典芸能」の「鑑賞の仕方」というものは、一体、どういうものになるのだろうか？ もちろん、それにもいろいろな方法があるかと思うが、基本的には次の「三つ」になるかと思う。――まず、一つは、やはりそれぞれの「古典芸能」の「基礎的知識」などをしっかりと学ぶことであり、一つは、できるだけ数多くの「舞台などを見聞きすることであり、そして、もう一つは、いわゆる「自らやってみる」ということである。恐らく、この「三つ」に尽きるのではないかと思う。

例えば、誰でもよく知っている「時そば」という落語があるが、もちろん、その話を全然知らない人たちも当然いるかと思う。それゆえ、最初は、何であれ、とにかく、一度、「時そば」の話を聴いてみることによって、その大体的内容を理解することになるかと思う。そして、その後も、いろいろな落語家が演じる「時そば」を何度も聴いていくうちに、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)にはいろいろな落語家が演じた「時そば」が、まさに「記憶保存」されていくことになるかと思う。そうすると、その次に、「時そば」を聴く時には、必ず、その人の「頭の中」(或いは「心の中」)に「記憶保存」されているいろいろな落語家が演じた「時そば」と、「……つねに比較対照しながら、その一つ一つを分析的に見聴きすることになる」かと思う。そして、今度の「時そば」を最後まで聴き終わったあとで、あらためて今までのいろいろな落語家の演じた「時そば」と比較対照してみると、今度の「時そば」は、「……ああだったこうだったというような感想とともに、今までのなかでは、何代目誰々という落語家が演じた『時そば』が、いちばんよかったなあ」というような感想にもなるということである。そして、例えば、歌舞伎の「仮名手本忠臣蔵」や「白波五人男」、その他の場合でも、まったく「同じことが言える」ということである。――一方、何らかの「古典芸能」などに「興味や関心」を持って、自らもやってみたいなあと思ひ、何年も練習を積み重ねては、その人なりに上達をして、いわゆる「自ら演じる」ようになれば、当然のことながら、今までのように、ただ単に「外から見聞きしていた時」には全く気づかなかった実いろいろなことが、まさに一つ一つ、わが身にかけて、実感として感じ知ることができ得るようになるのである。それゆえ、自ら演じること以上の「理解方法」は、どこにもないということである。

四、四つの要素

最後に、いわゆる「芸術鑑賞」について、もう少し考えてみたいと思うが、一般に、「芸術」という場合には、例えば、音楽、美術、彫刻、建築、工芸、その他、そのような分類になっていて、なぜか「文学」は、含まれないことが多いかと思うが、ここでは、敢えて「文学」をも含めて、いわゆる「芸術鑑賞」について、少し考えてみたいと思う。

例えば、「作品」というのは、間違いなく、作者の「思惟内容」(つまり様々な「思いや考え」+漠然としたもの)から生み出されて来るものであり、それゆえ、「芸術鑑賞」とは、すなわち、最終的には、その「作品」が生み出された時の作者の「思惟内容」(つまり様々な「思いや考え」+漠然としたもの)へと遡さかのぼることに他ならないのである。それをもう少し詳しく説明をすると、それは、次のようになるかと思う。——つまり、一つは、「作品」そのものの厳密な「鑑賞」であり、一つは、その「作品」が生み出された時の「作者」の「思惟内容」(つまり様々な「思いや考え」+漠然としたもの)の「鑑賞」であり、そして、もう一つは、その「作者の生い立ちや生活状況或いは時代背景、その他」などの「鑑賞」であり、恐らく、この「三つのもの」を合わせて行なわれるものが、今日の、まさに「芸術鑑賞」になるかと思う。

*

*

それでは、もっと具体的に話をしてみたいと思うが、まず、「作品」そのものは、一体、何から成り立っているのかと問えば、それは、いわゆる「四つの要素」からであり、一つは、「素材」(材料)であり、一つは、「技術」(能力)であり、一つは、「内実」(内容)であり、そして、もう一つは、いわゆる「個性」から成り立っているものである。

まず、いわゆる「素材」(材料)であるが、それは、「……言葉、色(色彩)、音(音彩)、造形(姿・形)、香り(匂い)、感触、その他」を初めとして、もちろん、それらに加えて、「……紙、木、布、皮革、竹、土(粘土)、石材、様々な金属類、宝石、ガラス、絵の具(顔料)、漆、染料、その他」などがあるかと思う。そして、作者(或いは「芸術家」というのは、何よりも自分を取り扱う「素材」(材料)などに関しては、どこまでも精通していなければならない。——例えば、文筆家であれば、「言葉や文字」などに精通し、また、音楽家であれば、「音(音楽)や楽器」などに精通し、そして、陶芸家であれば、いわゆる「土(粘土)や釉薬」などに精通し、その他、何であれ、自分が取り扱う「素材」(材料)などに関しては、どこまでも厳密に「見分ける、聴き分ける、嗅ぎ分ける、味ひ分ける、感じ分ける」ことができ得なければならず、そうでなければ、真に優れた「作品」を生み出すことはなかなかでき難いということである。

次に、いわゆる「技術」(「能力」)であるが、それは、その人の生まれ持った「素質や才能」、その他などに加えて、その人のたゆまぬ「努力や実践」などによって、初めて、獲得されるものである。それゆえ、その人のたゆまぬ「努力や実践」なくしては、いわゆる「技術」の上達も熟練も、半永久的にあり得ないということである。それに加えて、もう一つは、その「技術」の上達にどうしても欠かせないものに、いわゆる「道具」類があり、その「道具」類に対しても、どこまでも精通していなければならず、「技術」の上達とは、すなわち、まさに「道具」使用の上達とほとんど同意語であり、それほどまでに「技

術」と「道具」との関係は、切っても切れないほどの、まさに「一心同体的なもの」であるということである。そして、「技術」の上達こそは、そのまま「作品」の上達にも直結することになるのである。

次は、いわゆる「内容」（或いは「内実」）であるが、この「内容」（或いは「内実」）こそは、まさにその「作品」を生み出した時の作者の「思惟内容」（つまり様々な「思いや考え」+漠然としたもの）に他ならないということである。それをもっと簡単に言えば、「作品の内容」とは、すなわち、作者の「思惟内容」である、ということである。それに加えて、「芸術鑑賞」の場合には、どうしても「作品」そのものの「鑑賞」とともに、いわゆる「……作者は、一体、何を表現しようとしているのか、或いは、何を表現しなかったのか、また、ここはどうしてこういうふうになっているのか」などが、大きな問題になったりするものである。——例えば、レオナルド・ダ・ヴィンチの『最後の晩餐』や『モナリザ』（例えば「謎の微笑」）なども、いろいろと議論されたりするものであるが、それは、すなわち、『最後の晩餐』や『モナリザ』という「作品」を生み出した時の、レオナルド・ダ・ヴィンチの「思惟内容」（それは様々な「思いや考え」+漠然としたもの）がぜひとも知りたいということに他ならないのである。つまり、「作品の内容」の理解とは、すなわち、その「作品」を生み出した時の作者の「思惟内容」（それは様々な「思いや考え」+漠然としたもの）の理解に他ならないということである。

最後に、「個性」（或いは「特徴」）であるが、その人の「個性」（或いは「特徴」というのは、その人の「遺伝的要素」と「環境的要素」からなり、そして、後者の「環境的要素」とは、その人の「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全想い出、その他」）などから、自ずとその人なりの「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などが形成されるとともに、その人の生み出す「作品」のなかには、当然のことながら、それらが「反映」されることになるかと思う。そして、ここで取り上げる「個性」（或いは「特徴」というのは、むしろ、ただ単に他の人^{ほか}と変わっているということではなく、むしろ「獨創性」があるかないかということであり、それでは、その「獨創性」とは、一体、どういうものかと問えば、それは、結局、その人が人間として真に「内的成長（成熟）」しているかどうかであり、その人の真に成熟した「ものの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などから生み出されるものこそは、まさに真に「獨創性」を持ったものになり得るということである。

例えば、でたらめに楽器を演奏して、それを個性的（或いは「獨創的」）であると言っても、あまり意味はないだろう。それでは、なぜ、そうなのか？ それは、いわゆる「基本的なこと」がしっかりとマスターできていないからであり、「基本的なこと」がしっかりとマスターできていて、初めて、その基盤の上に、まさに「個性」（或いは「獨創性」というものは、自ずと生じて来るものであり、逆に、「基本的なこと」ができていない状態では、いわゆる「個性」の発揮のしようがなく、それは、ただの「でたらめ」になってしまうのである。それは、人間の場合にも基本的には全く同じことが言えるのである。

そして、真に「個性的」（或いは「獨創性」）があるというのは、むしろ、ただ単に他の人と変わっているということではなく、大事なことは、まさに「素材」「技術」「内実」それぞれが真に優れているとともに、さらに、真に優れたその人なりの「獨自性」（つまり「オリジナリティー」）があるという時にこそ、初めて、真に「個性的」（或いは「獨

創性」のある「作品」という「評価」になるのであり、また、真に優れた「作品」にもなり得るということである。(つまり、あれこれの小手先の問題ではないのである。)

以上、いろいろな例を挙げての「芸術鑑賞」についての考察であるとともに、もう一度、最初から最後まで丁寧に読んでもらえれば、いわゆる「作者」と「作品」、それに「芸術鑑賞」についての、ひと通りの理解が得られるのではないかと思う。

*

*

「参考文献」

※底本「世界の名著・プラトンⅠ」（中央公論社）

※底本「福音書」塚本虎二訳（岩波文庫）